Copyright by The Boards of Education, Kumamoto City

熊本城調査研究センター報告書　第４集

熊本城跡発掘調査報告書４

－熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査－

２０１７

熊本市熊本城調査研究センター

熊本城調査研究センター報告書　第４集

熊本城跡発掘調査報告書４

－熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査－

２０１７

熊本市熊本城調査研究センター

序　文

熊本城跡の一画に立つ熊本博物館の増改築工事に伴い、発掘調査を平成25年度・27年度に行ない、その報告書をこのたび刊行いたしました。

昭和53年に竣工したこの博物館は、築後35年を経て建物・設備のリニューアルが必要になりました。平成25年度に工事計画策定の基礎データを得るために調査し、明治10年以前の土層・遺構を現状保存する方針を決定し、増床部分の工法を変更、平成26年度に現状変更の許可を得て、平成27年度に工事によって影響が及ぶ部分を発掘調査し記録保存しました。

熊本城調査研究センターは発掘調査報告書として、昨年、本丸御殿復元工事・石垣修理工事に伴う調査について『熊本城跡発掘調査報告書２』・『熊本城跡発掘調査報告書３』をまとめましたが、本報告書は、これに次ぐものです。

熊本城は、壮大な石垣群とともに宇土櫓をはじめとする櫓や門、塀等が残る歴史遺産です。学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものとして評価され、特別史跡熊本城跡として指定を受けており、13の建造物も重要文化財となっています。

しかし、平成28年４月の熊本地震に遭い、大きな被害を受けました。この地に加藤清正が築いた近世城郭は、経験したことのない激しい連続した震動に襲われました。被災の規模は、わが国の城郭にとって未曾有といえます。

遡って熊本城は、廃藩置県後の西南戦争では建造物の多くが焼失するなどの憂き目にも遭いました。また、明治22年の金峰山地震では諸処の石垣が崩れるなど被災しましたが、石垣・櫓群の保存修理は、続けられてきました。昭和35年には市民の熱意があって大小天守外観が復元され、その後も熊本城跡をより一層理解しやすいよう、失われていた歴史的建造物が復元されてきました。現在では、市民や県民にとどまらず国内外を問わない多くの人々が訪れるところとなっており、今回の震災に際しても、皆さんから復興への熱い期待が寄せられています。国民の財産として認識され、後世に継承してゆく意思が示されています。

今後の修復に際しては、遺構の状況を確認するため調査が必須であり、歴史的な経過、科学的な根拠を踏まえなければなりません。保存活用のあるべき姿を求めながら進めていく必要があります。

熊本市では平成25年10月に「熊本城調査研究センター」を設置し、当該特別史跡の基礎的な調査と研究を進めており、上記の石垣修理の報告書とともに『特別史跡熊本城跡総括報告書　整備事業編』を刊行しております。今後も、縄張り、石垣、歴史的建造物、製造品、古文書、絵図類、写真など、他面にわたる資料を集めて総合的に解析します。その結果は震災からの復興に必ず役立ちます。熊本城跡の価値を後世に継承し、名実ともに日本を代表する歴史遺産として末永く伝わるよう努めていく所存です。

平成29年３月

熊本城調査研究センター

所長　渡　辺　勝　彦

例　言

1．本書は、特別史跡熊本城跡内に所在する熊本市立熊本博物館本館の増改築工事に伴って実施した発掘調査報告書である。

　併せて、博物館本館敷地内において実施した水道管漏水改修に伴う緊急工事立会の調査成果を報告する。この緊急工事立会は、同敷地内にて一連の調査期間中に実施されたものであり、本書をもって報告することとした。

2．発掘調査は、熊本市熊本城調査研究センターが行なった。

3．発掘調査は、金田一精（熊本城調査研究センター文化財保護主査）・美濃口雅朗（同文化財保護主幹）が担当した。

4．現場作業は平成25・27年度、整理作業・報告書作成は平成27・28年度に行なった。

5．現場作業における図面作成は金田・美濃口と、その指示のもと調査作業員が行なった。現場における写真撮影は金田・美濃口が行ない、一部を写測エンジニアリング株式会社に業務委託した。

6．現場作業における土層の色調表記は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。

7．座標数値は、国土調査法第Ⅱ座標系数値である。

8．整理作業・報告書作成は、熊本城調査研究センター内の作業室において行なった。

9．整理作業・報告書作成作業における図面作成は美濃口と、その指示のもと熊本城調査研究センター職員が行ない、一部を株式会社九州文化財研究所に業務委託した。

10. 出土品撮影は美濃口が行なった。

11. 図面・写真・出土品は熊本城調査研究センターに保管している。

12. 本書の執筆分担は下記の通りである。

　第１章１・第２章２：美濃口紀子（熊本博物館主幹兼主査）

　上記以外：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）

13. 本書の編集は美濃口雅朗が行なった。

14. 遺構の表記は以下の通り。

　近代の建物布基礎…SB　近代の配水溝…SD　土坑状の遺構・不明遺構…SX　柱穴状の遺構…SP

　※ SX・SP の表記は通し番号ではなく、調査区ごとに表記している。

　　例：SX1-6…１区の６号土坑状の遺構

　　SP22-1…22区の１号柱穴状の遺構

15. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。

　株式会社肥後屋・熊本県教育委員会文化課・熊本博物館評議会・甲元眞之・富田紘一・

　文化庁記念物課・渡辺芳郎（50音順，敬称略）

目　次

本文
第１章　序説
　１．調査に至る経緯……１
　２．調査組織……１
　３．調査の経過……１
第２章　位置と環境
　１．地理的環境……３
　２．歴史的環境
　　ａ．絵図・地図からみた土地利用の変遷……５
　　ｂ．既往発掘調査の概要……５
　　ｃ．博物館本館建設工事の概要……10
第３章　調査の方法
　１．調査方法と調査区の設定
　　ａ．ボーリング調査……11
　　ｂ．確認調査・本調査……11
　　（１）調査区の設定……11
　　（２）調査の目的と方法……11
　　c．立会調査 ……11
　２．基本層序……12
第４章　調査の成果
　１．土層・遺構
　　ａ．ボーリング調査……14
　　ｂ．確認調査・本調査……16
　　（１）概要……16
　　（２）屋内調査
　　－旧理工展示室増床基礎工事予定域－…18
　　（３）屋外調査
　　－空調屋外機・目隠し塀設置予定域－…37
　　ｃ．工事立会……38
　　ｄ．緊急工事立会……38
　２．出土遺物……40
第５章　総括
　１．土地利用の変遷……53
　２．土層堆積状況からみた土地改変……57
　３．出土品の様相
　　ａ．江戸時代の出土品……57
　　ｂ．近代の出土品……57
　　（１）土管……59
　　（２）煉瓦……60
　４．まとめ……61

挿図
第１図　熊本市城地形分類図……３
第２図　熊本城跡位置図……４
第３図　調査地周辺図－江戸時代絵図－……６
第４図　調査地周辺図－近代地図－……７
第５図　既往発掘調査区分図……８
第６図　既往発掘調査遺構配置図……８
第７図　二の丸御屋形南側石垣・排水溝現況写真
　－熊本地震被災前－……９
第８図　熊本博物館本館工事における掘削深度概要図
　……10
第９図　調査区分図……12
第10図　確認調査・本調査区設定図……13
第11図　ボーリング調査地点位置図……15
第12図　ボーリング調査土層柱状図……15
第13図　確認調査・本調査工程写真……16
第14図　確認調査・本調査区主要遺構配置図……17
第15図　１区実測図……18
第16図　２区実測図……19
第17図　２区 SB01実測図 ……20
第18図　３区実測図……21
第19図　４区実測図……22
第20図　５区実測図……22
第21図　６区実測図……23
第22図　７区実測図……24
第23図　８区実測図……25
第24図　９区実測図……25
第25図　10区実測図……26
第26図　11区・拡張区実測図……27
第27図　12区・拡張区実測図……28
第28図　13区実測図……28
第29図　14区実測図……29
第30図　15区実測図……29
第31図　16区実測図……30
第32図　17区実測図……31

第33図　18区実測図……31
第34図　19区実測図……32
第35図　20区実測図……33
第36図　21区実測図……34
第37図　22区実測図……35
第38図　23区実測図……35
第39図　24区実測図……36
第40図　屋外１～３区実測図……37
第41図　工事立会土層柱状図……38
第42図　工事立会地点位置図……39
第43図　出土陶磁器・土器類実測図１……44
第44図　出土陶磁器・土器類実測図２……45
第45図　出土陶磁器・土器類実測図３……46
第46図　出土陶磁器・土器類実測図４……47
第47図　出土陶磁器・土器類実測図５……48
第48図　出土陶磁器・土器類実測図６……49
第49図　出土陶磁器・土器類実測図７……50
第50図　出土金属製品実測図……50
第51図　出土石製品実測図……51
第52図　出土ガラス製品実測図……52
第53図　出土瓦実測図……52
第54図　出土瓦刻印拓影図……52
第55図　調査区周辺土地利用変遷図……53
第56図　Ⅱ層出土銅版摺り染付皿……54
第57図　主要遺構照合図……55
第58図　確認調査・本調査区土層柱状図……58
第59図　調査区周辺旧地形想定図……58
第60図　土管・煉瓦分類図……59

表

第１表　確認調査・本調査工程表……２
第２表　ボーリング調査土層観察表……14
第３表　工事立会調査一覧表……39
第４表　出土陶磁器・土器類観察表……40
第５表　出土金属製品観察表……43
第６表　出土石製品観察表……43
第７表　出土ガラス製品観察表……43
第８表　出土瓦観察表……43
第９表　出土瓦刻印観察表……43
第10表　近代遺物出土一覧表……56

写真図版……62

報告書抄録……75

第１章　序説

１．調査に至る経緯

熊本市立熊本博物館本館は昭和50年度より建設工事に着手し、昭和53年度、熊本城内に所在する現在地（熊本市中央区古京町３-２）へ移転、開館した。敷地面積は約14,000㎡である。その後の平成17年３月には本館を含む三の丸一帯が特別史跡熊本城跡の範囲に追加指定された。建築から35年が経過した平成22年頃からは、建物や設備の老朽化も問題となってリニューアルに向けた検討が始まり、平成23年度以降、基本構想・基本計画、基本設計・実施設計に着手した。

これらの計画を受け、平成25年８月23日付で熊本博物館本館の確認調査実施に伴う現状変更の許可申請を行なった。平成25年11月15日付で文化庁長官より確認調査実施に伴う現状変更の許可が下り、平成25年12月16日～同月20日にボーリング調査を、平成26年１月20日～同年３月20日に確認調査を実施した。その調査成果を受けて、文化庁、熊本県文化課、熊本市文化財保護委員会・文化振興課・熊本城調査研究センター・熊本博物館で協議を行ない、明治10年（西南戦争）以前の土層・遺構を現状保存するとの方針が決定したため、工法変更などの追加設計を行なった。これらを踏まえて平成26年８月14日付で増改築工事（発掘調査含む）に伴う現状変更の許可申請を行ない、平成26年10月17日付で文化庁長官より増改築工事（発掘調査含む）に伴う現状変更の許可が下りた。その後、平成27年５月11日～同年６月18日に発掘調査（本調査）を実施し、同年10月から増改築工事に着手した。

２．調査組織

平成25年度（現場作業）

調査主体：熊本市文化振興課・熊本城調査研究センター

調査総括：松石龍太郎（文化振興課長）

調査責任：清田　稔（文化振興課埋蔵文化財調査室長兼熊本城調査研究センター長）

調査庶務：堀坂太朗（文化振興課埋蔵文化財調査室主任主事）

調査担当：金田一精（文化振興課埋蔵文化財調査室兼熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）

平成27年度（現場作業・整理作業）

調査主体：熊本市文化振興課・熊本城調査研究センター

調査総括：濱田安拡（文化振興課長）

調査責任：渡辺勝彦（熊本城調査研究センター長）・河田日出男（熊本城調査研究センター副所長）

調査庶務：堀坂太朗（文化振興課埋蔵文化財調査室主任主事）

調査担当：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査）

平成28年度（整理作業・報告書作成）

調査主体：熊本市文化振興課埋蔵文化財調査室・熊本城調査研究センター

調査総括：濱田安拡（文化振興課長）

調査庶務：堀坂太朗（文化振興課埋蔵文化財調査室主任主事）

調査責任：渡辺勝彦（熊本城調査研究センター長）・網田龍生（熊本城調査研究センター副所長）

調査担当：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）・竹田知美（熊本城調査研究センター嘱託職員）・村田理恵（熊本城調査研究センター嘱託職員）

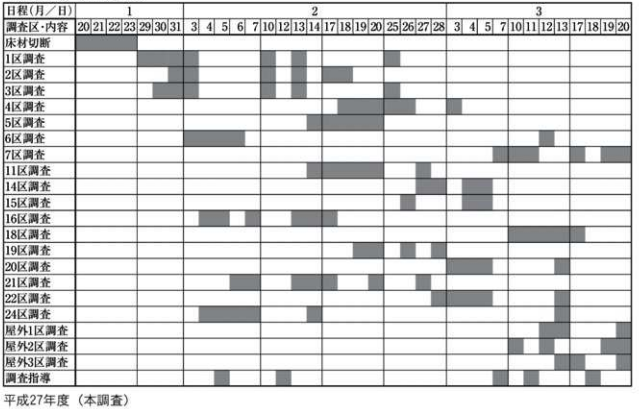
３．調査の経過（第１表）

本報告における発掘調査にはボーリング調査・確認調査・本調査・工事立会がある。ボーリング調査は

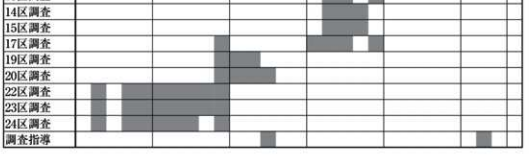
平成25年12月16日～同月20日、確認調査は平成26年１月20日～同年３月20日、本調査は平成27年５月11日～同年６月18日と平成28年２月15日（追加調査）、工事立会は平成27年12月21日～平成28年３月８日に実施した。確認調査・本調査の工程と経過は第１表をもって記す。その他、博物館敷地内において水道管漏水改修に伴う緊急工事立会を平成27年１月21・22日に行なっている。

第１表　確認調査・本調査工程表

平成25年度（確認調査）



平成27年度（本調査）



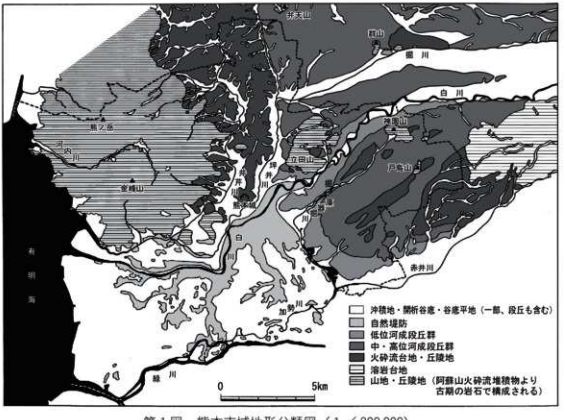
第２章　位置と環境

１．地理的環境（第１・２図）

熊本市域の地勢を大別すると、北西部は有明海と内陸部を隔てる金峰山塊、南西部は有明海に望む熊本平野（沖積平野）、北部・東部・南部は広範な洪積台地（火砕流台地・河岸段丘）により構成される。洪積台地は東西に貫流する白川・緑川の水系によって開析され、熊本平野はその活発な沖積作用によって形成されたものである。

熊本城跡は、熊本市域のほぼ中央に位置する通称京町台地南端に立地し、この台地は阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。成因となった火砕流は数万年の間隔をおいて４回起こり、最大規模であった約９万年前といわれる最後の火砕流（Aso-4）は熊本市域を広範に厚く覆っている。市域東側の台地については火砕流の上部に河成段丘堆積物である砂礫層が被覆しているが、この砂礫層は京町台地までは到達していないため、京町台地から西側の金峰山塊までの間は Aso-4西端部の様相を呈している。Aso-4は、深い部分では溶結して硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分では溶結が進まずに軟質の非溶結凝灰岩となっている。熊本城域においては、熊本県立第一高等学校グラウンド・県営藤崎台野球場南側・清爽園（明治時代に整備された庭園）などの崖面に非溶結凝灰岩の露頭が確認できる。Aso-4堆積後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰土に覆われている。火山灰土の上位は腐植の集積した黒ボク土で、下位は粘性の強い褐色土である。黒ボク土の下位には、26,000 ～ 29,000年前とされる鹿児島湾の姶良大噴火に起因する姶良Ｔｎ火山灰が混入し、肉眼でも火山灰ガラスを観察できる。その上部に約7,300年前の鬼界カルデラ噴火に起因するアカホヤ火山灰土が確認される地域があり、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

上記のように火砕流堆積物と火山灰土によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川によ



第１図　熊本市域地形分類図（１／200,000）

り開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びている。台地の表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至っている。

熊本城跡が立地する京町台地の南端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなっており、古くから茶臼山と呼ばれてきたように独立丘陵状を呈している。この茶臼山は、平面形は河川開析による大小の弧の連続で構成され、南側の熊本県立第一高等学校付近を要として東西に開いた扇形を呈し、熊本城本丸付近を頂部（約50m）として東には急に、西へは緩やかに傾斜している。本報告の対象地である熊本市立熊本博物館本館は茶臼山北西部に位置しており、現況の周辺地形から推して、本来は南東から北西方向に落ちる緩傾斜地であったとみられる。調査地の標高は約26mである。

第２図　熊本城跡位置図（１／11,000）

2．歴史的環境

a．絵図・地図からみた土地利用の変遷（第３・４図）

調査地である博物館本館敷地は、熊本城三の丸地区に所在する。当該地は江戸期を通して主に中上級家臣の屋敷地として利用されていた。絵図資料[1]によると、調査地に限って見た場合、明暦期頃（1750年代）～天明期頃（1780年代）においては、11～13軒の屋敷が、東西・南北方向に延びる道によって４区画に分断された中に建ち並んでいた様子が判る（第３図１～４）。一門細川刑部家下屋敷の他、中級家臣の屋敷であり、絵図に記載された住人の名前は時期によって入れ替わるが、屋敷の配置自体は各時期を通じて大きく変わることはない。しかし文政７年（1824）になると、すでに隠居していた８代藩主細川斉茲の別邸として博物館所在地の北側（現細川刑部邸の場所）に「二の丸御屋形」が新たに建設された。この屋敷は西下段に東屋・花壇・動物飼育施設を併設した贅沢なもので、占有面積もかなり広い。これを画期として、一帯の土地利用のあり方が大きく変化したものと思われ、天保期以降の絵図（第３図５・６）をみると、周辺を含めて大規模な造成・改変が加えられていることが判る。調査地についても、区画の北側に「二の丸御屋形」南側の勢溜とみられる空閑地が設けられるなど、改変が認められる。

近代に入ると鎮西鎮台（後に熊本鎮台に改称）の設置により熊本城一帯は軍の管轄下に置かれ、調査地周辺も陸軍の所管となるが、明治10年（1877）の西南戦争によって一帯は焼失した。その後、旧日本陸軍による管理が続き、明治42年（1909）の地図（第４図２）には輜重隊第六大隊の兵営が見られるが、まだ江戸期の区画を維持しており、「二の丸御屋形」南側の空閑地・通路も残っている。しかし、大正元年（1912）の地図（第４図３）では「二の丸御屋形」南側の空閑地・通路は無くなり、輜重隊兵営の敷地が調査地まで拡張して建物が描かれていることから、この３年の間に旧日本陸軍による大規模な整地・区画改変が行なわれたと考えられる。

現代になると一帯は厚生省が管轄し、国立病院用地となる。調査地内には当時、国立病院長の官舎や看護学院の校舎・寄宿舎などが建てられたが、近代建造の輜重隊建物も再利用されており、博物館建設工事直前まで残されていた。その後、調査地は博物館本館建設予定地となり、昭和48年に確認調査が実施された。江戸期の遺構の多くは軍時代の工事により壊されていたが、「二の丸御屋形」の南側石垣と排水溝など良好に残っていた遺構もあった。その後、昭和50年度から着手した博物館本館建築工事に伴う大規模な掘削や杭打ちによって遺構の多くは破壊されたと考えられるが、井戸など深い遺構については一部が残っている可能性がある。なお本書で報告する発掘調査は、平成17年３月に当該地が「特別史跡熊本城跡」に追加指定されて以降、初めての機会である。

b．既往発掘調査の概要（第５～７図）

熊本博物館本館の移転新築に先立ち、昭和48年８月に埋蔵文化財等の確認調査が行なわれ、昭和49年に報告書が刊行された[2]。以下、報告書をもとに概要を記す。

調査は江戸時代の遺構確認を主目的とするため、幕末期の絵図をもとに調査区を分け（イ～ホ区）、屋敷等の境界線などを確認すべく、トレンチ調査の位置を設定している。

イ区：鈴木屋敷・金津屋敷・定府屋敷北側　　ロ区：定府屋敷南側

ハ区：岩間屋敷北東側　　二区：傅役屋敷　　ホ区：二の丸御屋形南側

江戸時代の遺構としては、ホ区における「二の丸御屋形石垣とそれに伴う排水溝」が最も残りの良い状態で検出されたものである。石垣は安山岩の割石で構築され、石積４～６段、高さ1.6～2.9m程度で、東西方向に長さ95mまで確認された。石垣用材は武家屋敷境のものより大きい。石垣面のうち２ヶ所には、御屋形内の水を排水溝へ注ぐための排水口がみられる。これには凝灰岩の切石が使用され、熊本城内にみられる他の排水口と同じ構造を採っている。石垣下の排水溝は、幅約90cm・高さ約80cmで、側壁は凝灰岩 の切石を４段積み上げ、漆喰状のもので目貼りしている。排水溝は地形に沿って東側が高く西側が低

1．明暦年前後（1650年前後）

2．元禄年前後（1690～1700年頃）

3．宝暦年後半頃（1760年代頃）

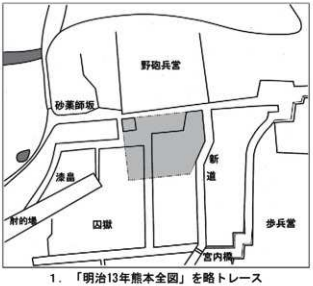
4．天明年前後（1781年前後）

5．天保年頃（1830年代頃）

6．天保年～幕末頃

1～4…註文献２を加筆・転載　アミかけ…調査地範囲
5・6…絵図を略トレース

第３図　調査地周辺図－江戸時代絵図－



1．「明治13年熊本全図」を略トレース

2．「明治42年熊本市明細案内地図」を略トレース

3．「大正元年陸地測量部熊本図幅」を略トレース

4．「昭和６年陸地測量部金峰山図幅」を略トレース

淡いアミかけ…調査地

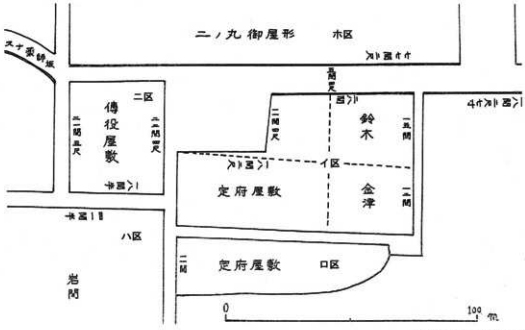
第４図　調査地周辺図－近代地図－

い。東側では石垣線に沿ってほぼ並行して走っているが、西側になるほど次第に南側に逸れ、途中から通路の中央を斜断している。排水溝には蓋石が被せられており、西側では当初からのものとみられる凝灰岩製の揃った切石を、東側では後の時代に被せたとみられる安山岩製の不揃いな板石を用いている。ニ区（傅役屋敷）においては、西・南・北側３方向の石垣線が確認された。西側は下位が江戸期で上位が後世の積み上げ、南側・北側はそれぞれ根石１段のみが検出された。ハ区（岩間屋敷北東側）に関連しては北側の石垣５～６段が検出され、うち下部の１～２段（安山岩の割石）のみが江戸期のものと考えられる。イ区においては、鈴木屋敷・金津屋敷の屋敷境と考えられる石垣線が確認された。安山岩の割石１～２段が残存し、東西方向に長さ８ｍにわたって検出された。

旧日本陸軍時代の遺構としては、輜重第一中隊の兵舎に付属する排水溝、工廠に付属する排水溝・溜桝・排水口があり、江戸期の屋敷割を全く無視して築かれた石垣線なども検出されている。

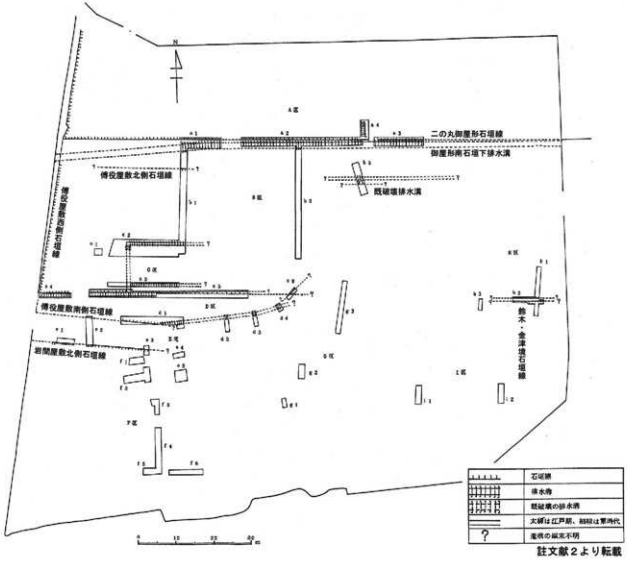
以上のように調査成果としては江戸期の遺構も一部で検出されたが、「軍時代の工事によると考えられるものが倍して検出」されている。ゆえに、近代以降の開発工事によって江戸期の遺構の多くは破壊されていたものと考えられる。

なお報告書では、調査成果をもとに「遺構保存に対する要望」として博物館建設にあたっての留意点が



天保年～幕末頃の絵図より作成
註文献２より加筆・転載

第５図　既往発掘調査区分図（１／1,500）



第６図　既往発掘調査遺構配置図（１／1,000）

提示されている。それは、「二の丸御屋形」南側の石垣と排水溝を露出させ江戸期の状態に復元保存する、傅役屋敷の屋敷区割石垣を博物館前庭に露出する、博物館の敷地南側斜面（藤崎台より北に下がる頬斜）は旧来の姿を留めるものなので今後削平等の改造は避けるべきというもので、さらに「着工にあたって」の中で以下の要望があげられている。

・今回の発掘で諸事情により調査が行なえなかった看護学院敷地内などの一帯の調査が必要。

・博物館の建物の下になる部分は完全に露出した上で記録に残すことが必要。

・建設に伴う前庭及び諸工事では軍時代に盛土した深さ以下の削平は極力避けてほしい。

・博物館に通じる通路等においても遺構の存在に充分注意し、存在部以外に予定・設計する。

その結果、「二の丸御屋形」南側の石垣と排水溝等は保存されて現在に至っている。しかし、敷地内での本格的な発掘調査や記録は実施されないまま、昭和50年度から博物館本館の建設工事が行なわれた。

石垣・排水溝・博物館本館建物（東から）

石垣・博物館本館建物（西から）

石垣（南から）

石垣排水口

排水溝（西から）

排水溝側壁

第７図　二の丸御屋形南側石垣・排水溝現況写真－熊本地震被災前－

c．博物館本館建設工事の概要（第８図）

熊本博物館に保管されている昭和50年度の本館建設工事写真を見ると、建築に先立って地下室部分をはじめ大規模な掘削工事が行なわれたことが判る。基礎図面によれば、工事基準高からの掘削深度は、地下室がある区域が最大7.25mで、他約4.10m、3.40mとされる箇所があり、地下室が無い区域では1.70mとなっている。また杭伏図によれば、直径30cm 長さ20m前後の杭が膨大な数（合計1500本以上）打ち込まれていることから、本館の地下室がある部分においては、殆どの遺構が工事によって破壊されたと考えられる。ただし、掘削深度7.25mとされる地下室区域においても、工事中に井戸とみられる穴が検出されており[3]、今も本館建物の地下深くに一部の遺構が残っている可能性が高い。なお、平成24年10月に搬出入口（今回工事ではトラックヤード予定箇所）でボーリング調査を行なった結果、現地表から約6.90mまでは建設工事による客土であり、昭和50年度工事の掘削深度が実証される結果となった。

建物の周囲は、昭和50年度工事の大規模な造成による盛土等で広く覆われており、場所によっては遺構が残存している可能性もあるが詳細は判らない。盛土の高さは、搬出入口では工事前の地表面に比べて最大３ｍ程度と考えられる。

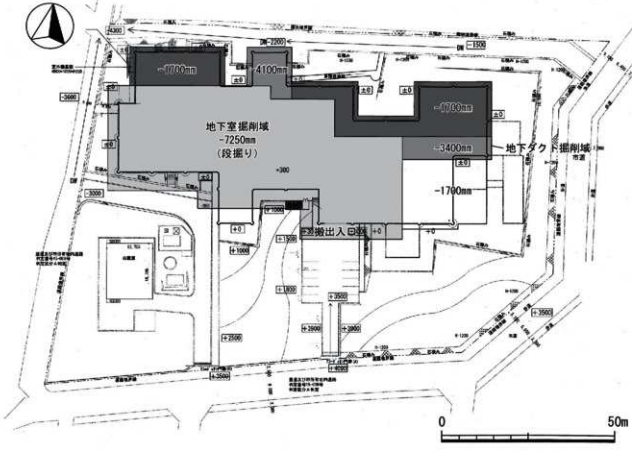
註

1）主に下記文献を参照。

『新熊本市史　別編第一巻　絵図・地図　上　中世近世』熊本市　1993

2）熊本博物館建設準備室『熊本市古京町二の丸跡調査報告書－熊本博物館建設予定地－』1974

3）博物館本館建設工事業者が簡易な報告書を作成しており、それによれば井戸とみられる穴が３基検出されたとのことである。



第８図　熊本博物館本館工事における掘削深度概要図（１／1,100）

第３章　調査の方法

１．調査方法と調査区の設定（第９・10図）

ａ．ボーリング調査

平成25年度、確認調査に先立ち、昭和50年度の博物館本館建設工事前の土層の残存状況を確認するためボーリング調査を行なった。ボーリング箇所は、屋内については増床基礎やトイレなどの設置、屋外については空調機・目隠し塀の設置等、増改築工事に伴う掘削予定部分に６箇所、加えて現況把握の必要性から本館建物周囲に５箇所、計11箇所を設定した。ボーリング径は66㎜、掘削深度は～3.1ｍである。土層観察は、採取したボーリングコアをもとに発掘調査担当者が行なった。

ｂ．確認調査・本調査

（１）調査区の設定

増改築工事計画・ボーリング調査結果を踏まえ、手掘り作業を伴う調査区を設定した。

屋内においては、増床に伴って新たに基礎工事を行なう予定の旧理工展示室800㎡を対象とした。調査はコンクリート製・厚さ20cm の床材を重機により撤去し、その地下を掘削するものであるが、地中梁などの既存構造物がある部分、さらには、本館建設工事の際に深くまで掘削していることが明らかな地下室（－7.25ｍ）・地下ダクト（－3.40ｍ）部分は除外することとした。結果、調査区は原則４×４ｍの方形を１単位として、これを24箇所設けている。本報告では１単位を「区」と呼称する（１～24区）。

屋外においては、本館建物東側に接して空調屋外機・目隠し塀を設置するために現地表面下約25cm まで掘削する予定の200㎡の範囲を対象とした。既存の建物基礎・埋設管を避け、平面長方形の調査区を３箇所設けている。本報告では屋外１区～屋外３区と呼称する。

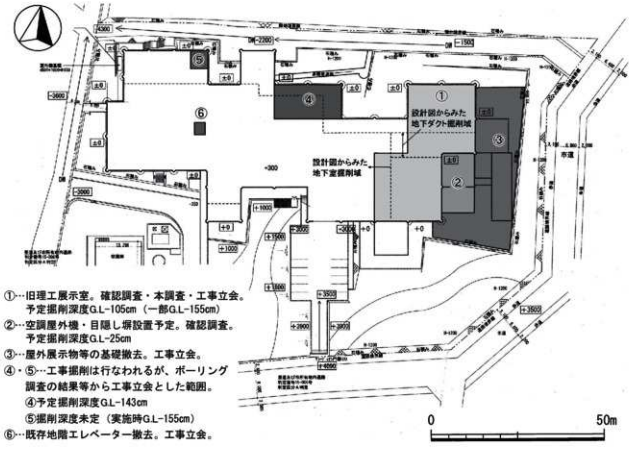
（２）調査の目的と方法

平成25年度に実施した確認調査は、昭和50年度の博物館本館建設工事前の土層・遺構の存在状況を把握することを目的とした。床材撤去後、本館建設工事の際の造成土・明らかな近代の堆積土までを重機により掘削し、以下を手掘りした。必要に応じて調査区内にトレンチを設け、土層・遺構の存在状況を確認している。遺構は原則、上面確認に止めている。

平成27年度調査に実施した本調査は、平成25年度の継続調査であり、旧理工展示室800㎡を対象とした。調査に先立っては関係機関による協議を行ない、明治時代初期（西南戦争頃）以前の土層・遺構については現状保存を図るという観点から、平成25年度調査成果をもとに増改築工事による対象地の掘削深度を現状床面下105cm と設定した。これに基づき、平成27年度の本調査は、原則、現状床面下110cm の高さで掘り止め、記録保存を図るものとなった。平成25年度の確認調査において未着手であった箇所、着手はしたものの現状床面下110cm まで掘り下げていなかった箇所を対象としている。床材撤去後、博物館本館建設工事の際の造成土を重機により掘削し、現状床面下110cm 未満の近代の堆積土・遺構を手掘りした。ただし、11区とこれに隣接する地中梁の１ｍ幅部分については、現状床面下155cm の掘削を伴うエレベーター設置工事が予定されていたため、工事設計担当者と協議し、土層・遺構への影響が最小限に留まるよう設置位置を変更したうえで、工事による影響が及ぶ高さまで手掘り調査を行なっている。

ｃ．立会調査

以下①～③については工事立会をもって対応している。①平成25年度に実施したボーリング調査の成果から、昭和50年度の博物館本館建設工事時の造成土が厚く堆積し、増改築工事による掘削がその中に収まると判断された箇所の工事。②旧理工展示室800㎡の確認調査・本調査において扱えなかった地中梁部分等の撤去工事。③屋外展示物等の基礎撤去工事。なお、②の期間中、エレベーター設置部分（11区に隣接する地中梁１ｍ幅）等について、地中梁の撤去後、手掘りによる追加調査を行なっている。



第９図　調査区分図（１／1,100）

２．基本層序

Ⅰ～Ⅶ層に大別する。

Ⅰ層：昭和50年度の博物館本館建設工事時の建築材・造成土。３層に細分する。

Ⅰ１層：コンクリート製床材。

Ⅰ２層：山砂。

Ⅰ３層：造成土。近代の整地土であるⅡ・Ⅲ層に近似するが、これらよりも締りが弱く、間隙性が高い。また、大形のコンクリート塊や明らかに現代の所産であるビニール・プラスチック片等を含む。

Ⅱ層：近代の造成土。灰白色（10YR7/1）～明赤褐色（5YR5/6）を呈する火砕流堆積土ブロック・ローム土ブロックを基質とする、あるいは暗褐色土（10YR3/3）を基質として火砕流堆積土・ローム土ブロックを極多量に含む土である。前者は調査地南側に、後者は調査地北側に偏在する傾向が認められる。

Ⅲ層：近代の造成土。主に暗褐色（10YR3/3）を呈する。Ⅱ層に比べて明らかに粒度が細かく、火砕流堆積土・ローム土ブロックなどの混入物は少ない。薄く縞状に細分され、硬化する箇所も認められる。

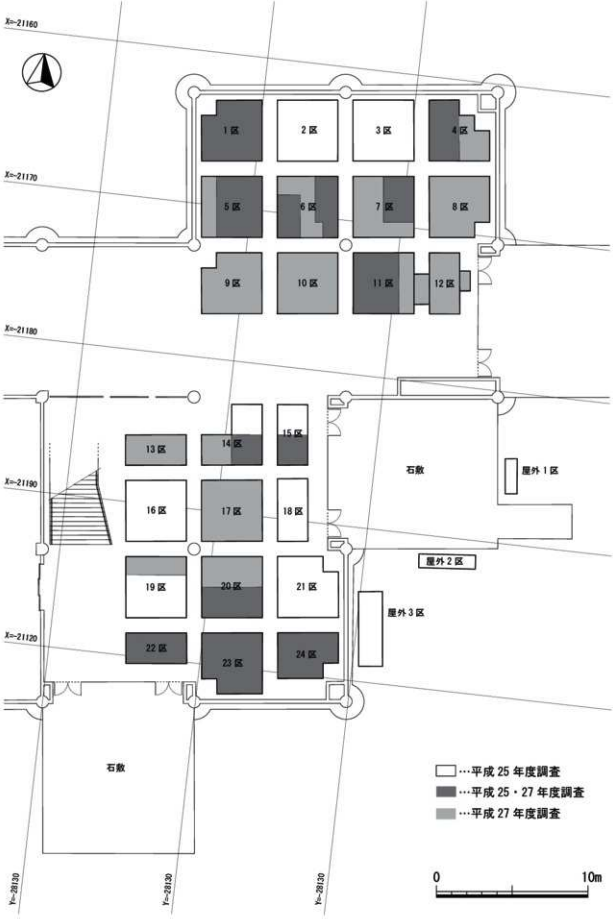
※Ⅱ・Ⅲ層はともに近代の造成土であり、その堆積成因を反映して箇所によって土質が異なる場合が多く、バリエーションは多様である。本項では共通する属性を記している。

Ⅳ層：暗褐色土（10YR3/3～10YR3/4）。以下は自然堆積土である。市域調査の成果から縄文時代後晩期の堆積層と判断される。

Ⅴ層：黒褐色土（10YR2/2）。粒土が細かく、締りは強い。

Ⅵ層：所謂ニガ土。黒褐色（10YR2/3）～暗褐色（10YR3/3）を呈し、基質はブロック化する。姶良Ｔｎ火山灰ガラスが認められる。

Ⅶ層：ローム土。黄褐色（10YR5/8）～明黄褐色（10YR7/6）を呈する。粘性が強い。



第10図　確認調査・本調査区設定図（1／250）

第４章　調査の成果

１．土層・遺構

ａ．ボーリング調査（第11・12図，第２表）

ボーリング調査は、本館建物周囲に５箇所（№１～５）、本館建物内に６箇所（№６～11）、計11箇所において実施した。径66mmのボーリングコアをもとにした土層観察であるため制約はあったが、以下の観点から堆積時期を認定している。

博物館本館建物のコンクリート床材・直下の山砂：昭和50年度建設の本館建物の構築材である。

博物館本館工事以降の造成・整地土：Ⅰ層に相当し、以下の二者が認められる（①・②）。

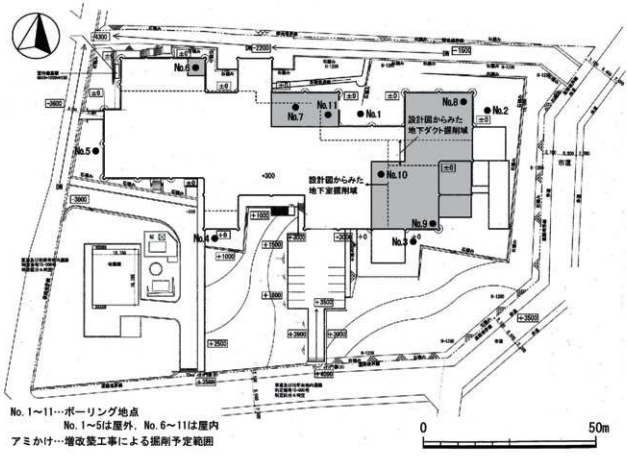
① 主に暗褐色土を基質とし、間隙性が高い。混入物が多く、明らかに撹拌された二次堆積土である。本館建設工事時に用いたとみられる山砂を含む。コンクリートブロック・コークス片を含む場合もある。№６においては互層状の版築層が認められる。

② 砕石・コンクリート層。①に比べて客体的である。

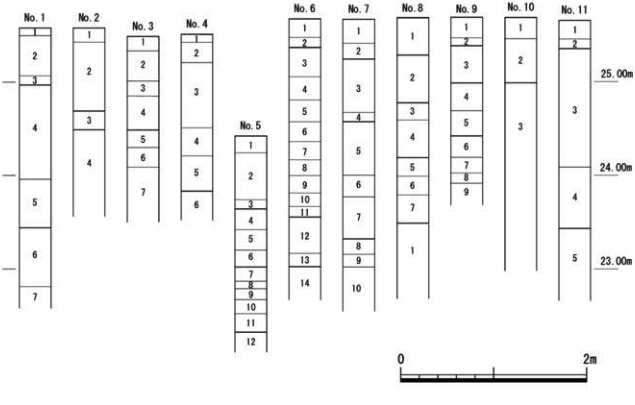
近現代の造成・整地土：黒褐色土・暗褐色土を基質とし、間隙性が高い。混入物が多く、明らかな二次堆積土である。コンクリートブロック・コークス片を含む場合があるが、山砂は含まない。№１においては互層状の版築層が認められる。

第２表　ボーリング調査土層観察表

№	土層名						
備考	本館建物のコンクリート床材・直下の山砂	本館工事以降の造成・整地土	近現代の造成・整地土	江戸時代～近代とみられる造成・整地土	自然堆積土か（可能性高い）	自然堆積土	
1		１～３層	４・５層	６・７層			
備考		３層はコンクリート・砕石	４層はコークス片混入，５層は互層状の版築	７層は火砕流土を基質とし互層状，Ⅱ層に相当か			
2		１・２層		３層		４層	
備考		１層は砕石層，２層は本館建設工事時の造成土		火砕流土を基質とし砂質感強い，Ⅱ層に相当か		Ⅶ層に相当	
3		１～４層				５～７層	
備考		２～４層は本館建設工事時の造成土				６層は Ⅵ層・７層は Ⅶ層に相当	
4		１～５層				６層	
備考		４・５層は山砂を含む，本館建設工事時の造成土				Ⅵ層に相当	
5		１～３層	４～６層	７～11層	12層		
備考		３層は山砂を含む，本館建設工事時の造成土	６層は焼土粒・炭化物粒・小礫を多く含む	褐色土粒を含む，８～11層は土師器片を含む	縞り・粘性強い黒色土，Ⅴ層に近似		
6	１・２層	３～11層	12・13層	14層			
備考		山砂を含む，９・10層を除いて互層状の版築		Ⅶ層・火砕流土ブロック等多い，Ⅲ層に相当か			
7	１・２層	３・４層	５～７層			８～10層	
備考		４層は捨てコン	砂質感強く炭化物粒を含む			９層は Ⅵ層・10層は Ⅶ層に相当	
8	１層	２層	３・４層	５～７層	８層		
備考		４区Ⅰ3層に相当，下面に捨てコンが認められる		５・６層は粘性強い，７層は混入物多い	火砕流の一次堆積層か		
9	１・２層	３層	４・５層			６～９層	
備考		24区Ⅰ3層に相当	３層に近似，砕石を含む			８層は Ⅵ層・９層は Ⅶ層に相当	
10	１・２層	３層					
備考		本館地下室の造成土					
11	１・２層	３・４層				５層	
備考		４層はコンクリート・砕石層				Ⅶ層に相当	



第11図　ボーリング調査地点位置図（1／1,100）



第12図　ボーリング調査土層柱状図（1／40）

江戸時代～近代とみられる造成・整地土：基質土は様々で、黒褐色土・暗褐色土・灰白色土（火砕流堆積土）などがみられる。混入物は層によって多寡がある。いずれも近現代の土層に比べて基質の粒度が細かく均質であるが、明らかな二次堆積土である。

自然堆積土：Ⅳ～Ⅶ層に相当するとみられる。特徴が明確なⅥ・Ⅶ層については認定が容易であった。

以上より、近現代の造成・整地土が厚く堆積している、明確な江戸時代の層は認識できない、多くの場合において自然堆積土は削平されている、などの点を確認した。このボーリング調査の成果をもとに、後の調査方針の大略を決定している。

b．確認調査・本調査

（1）概要（第13・14図）

主要遺構として建物布基礎（SB01～05）、土管を伴う配水溝（SD01）が挙げられる。出土遺物や検出層位から、いずれも近代の構造物と判断されるものである。他、1～4・7・11・14～16・18・21・22・24区において土坑状・柱穴状の掘り込みを検出している。なお、7～12区と13～15区の間は地下ダクト工事、13・16・19・22区の西側は地下室工事（ともに昭和50年度の博物館本館建設工事）により大きく撹乱されていることを確認している。

床材撤去

重機掘削

手掘り作業

実測作業

埋め戻し－薄く砂を敷いて調査面を明示－

埋め戻し－バックホウ・ランマー使用－

第13図　確認調査・本調査工程写真

第14図　確認調査・本調査区主要遺構配置図（1／250）

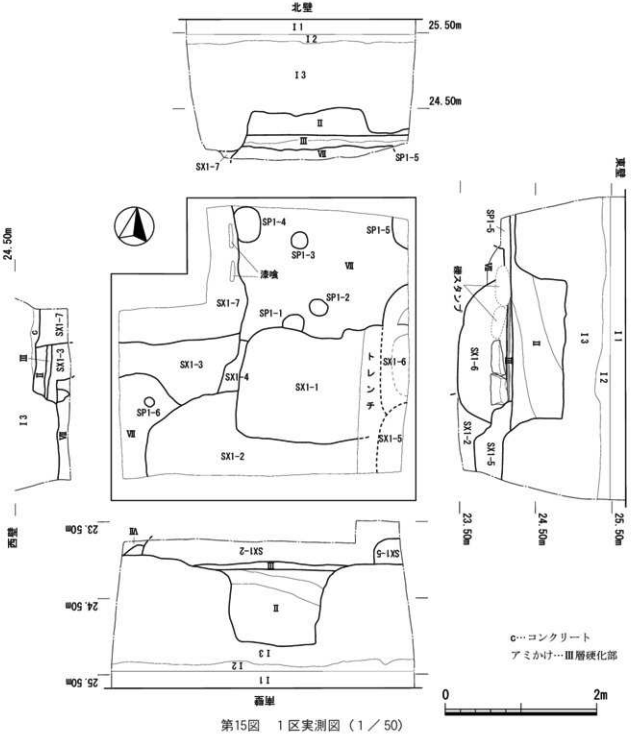
（２）屋内調査－旧理工展示室増床基礎工事予定域－

１区－平成25・27年度調査－（第15図）

平成25年度に主要調査を行なった。平成27年度は、調査区壁の土層断面撮影のみを行なっている。

Ⅱ層は暗褐色土を基質とし火砕流堆積土ブロックを極多量に含む造成土で、一時期に埋没した可能性が高い。２区において後述するように、SB01廃絶に伴う土層と考えられる。Ⅲ層は小礫・瓦片を多く含む整地層で、薄く硬化する部分が認められる。

遺構は、Ⅶ層上面において SX1-1～7・SP1-1～6を、他、調査区壁面において小形の掘り込み２基を検出しており、これらの埋土は暗褐色土・黒褐色土を基質としている。遺構の時期は、Ⅱ層下位を掘り込む SX1-7、Ⅱ層が被覆しⅢ層を掘り込む SX1-5、Ⅲ層が被覆する SX1-2・6の３期に大別され、さらには



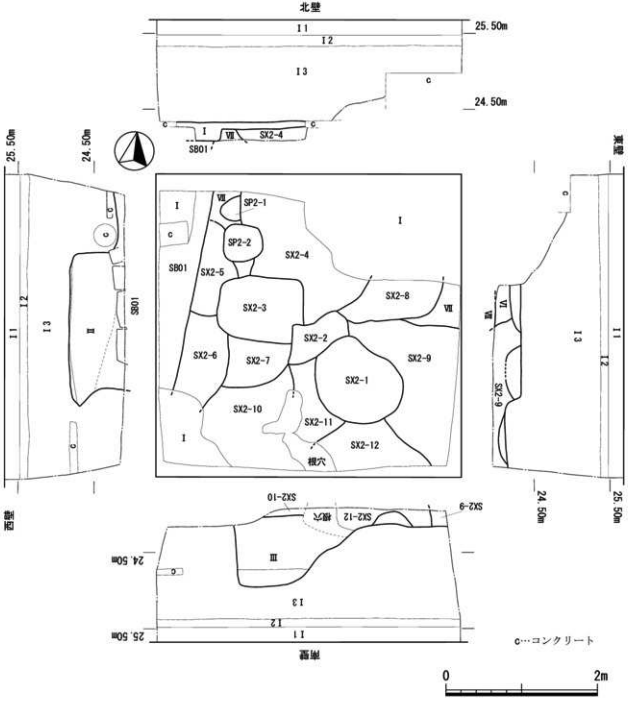
第15図　１区実測図（１／50）

上面確認においてSX1-6よりも先行するSX1-1・3・4がある。特記されるのはSX1-6・7である。SX1-6は上位において略立方形に整形した凝灰岩が列状に検出されており、上部にはⅢ層硬化土が被覆している。東隣する２区SB01構築との関連が考慮される遺構である。SX1-7は埋土の締りが弱く色調が暗い点、東壁に沿うように漆喰が確認されている点から水槽の可能性を指摘できる。

２区－平成25年度調査－（第16・17図）

調査区壁面を観察すると、西壁では一時期に埋没した可能性が高いⅡ層がSB01上部を被覆しており、Ⅱ層はSB01廃絶（建物基礎の撤去）に伴うものと考えられる。また、南壁ではⅡ層と同じ高さにおいてⅢ層が認められ、この部分についてはSB01廃絶による削平を受けていなかったものと考えられる。

遺構は、Ⅶ層上面においてSB01、SX2-1～12、SP2-1・2を、調査区壁面において浅い掘り込み４基



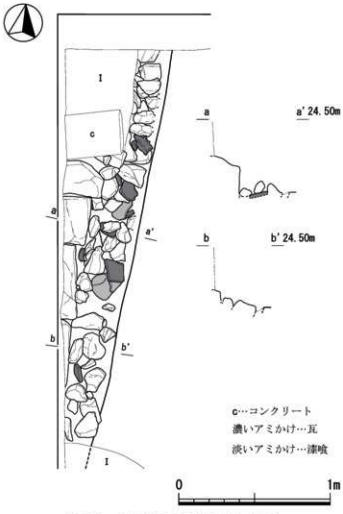
第16図　２区実測図（1／50）

を検出し、これらの埋土は暗褐色土～黒褐色土を基質としている。SB01は重複する遺構を壊している。根石とみられる略立方形に整形した凝灰岩が列状に据えられ、その周囲に安山岩砕石を主体に瓦片・瓦質土器片・漆喰ブロックが込められている。方位はN-5°-Eを示し、調査区外に伸びているが、南側の延長部にあたる5区においては、本址検出レベルまで掘り下げていないためであろう、未検出である。

3区－平成25年度調査－（第18図）

Ⅲ層下位は、薄く縞状に細分される堆積状況から整地土と判断される。

遺構は、Ⅶ層上面においてSX3-1～12、SP3-1・2を、調査区壁面において土坑状の遺構・安山岩砕石が集中する遺構等を検出し、これらの埋土は暗褐色土を基質としている。遺構の時期は、Ⅱ層が被覆しⅢ層上面から掘り込まれる安山岩砕石が集中する遺構（調査区南壁において検出）、Ⅲ層中位から掘り込まれるSX3-5、Ⅲ層が被覆するSX3-6・7・12の3期に大別される。安山岩砕石が集中する遺構（調査区南壁において検出）は、南隣する7区において検出されていないことから地点的な掘り込みと考えられる。



第17図　2区 SB01実測図（1／25）

4区－平成25・27年度調査－（第19図）

本区は西半分を平成25・27年度に、東半分を平成27年度に調査した。現状床面下110cmにて掘り止め、西壁際にトレンチを設けている。

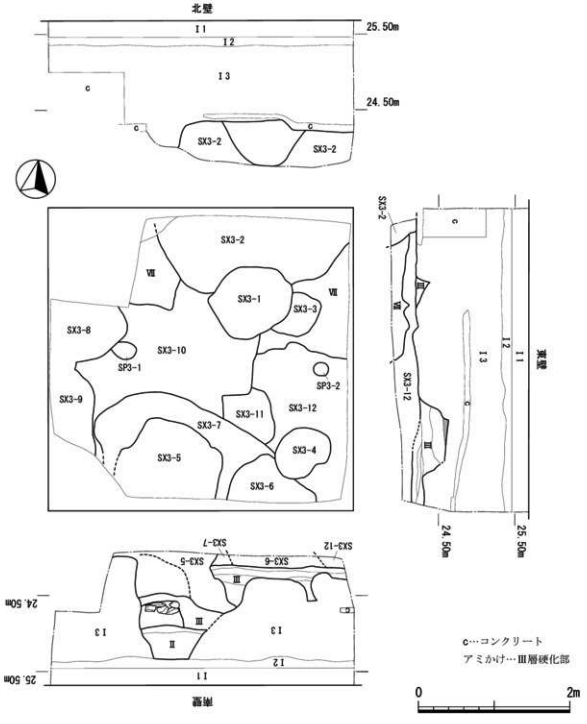
SX4-1（トレンチ内検出）・SX4-2は、ともにⅢ層下位を掘り込んでおり、埋土は暗褐色土を基質とする。なお、平成25年度調査時、壁断面a-a'において安山岩転礫の集中が認められたが、平成27年度調査では手掘りを行なったにもかかわらず、その延長は検出されなかった。

5区－平成25・27年度調査－（第20図）

本区は現状床面下110cmにて掘り止めているが、SB02にかかるⅠ層撹乱内についてはトレンチを設け、土層断面の観察を行なっている（断面a-a'）。

遺構は、Ⅱ層中に掘り込まれるSB02を検出している。方位はN-81°-Eを示し、東側の6・7区に延びる。掘り込み下位に10cm大前後の転礫を主体とする安山岩礫が集中しており、基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。埋土は暗褐色土で、上位はⅡ層との弁別が難しいが、礫が集中する下位は混入物が少なく締りが弱い。

なお、本区においては、東隣する6・7区で検出されたⅢ層と同じ高さにⅡ層が堆積しており、1m幅の未調査域を隔て、本区と6区とでSB02が掘り込まれる土層が異なっている。その理由は、1・2区の土層堆積状況において指摘したように、本区におけるⅡ層はSB01廃絶（建物基礎の撤去）に伴う部分的な造成土と考えられ、これが6区までは及んでいないためと考えられる。なお、本区では検出レベルまで



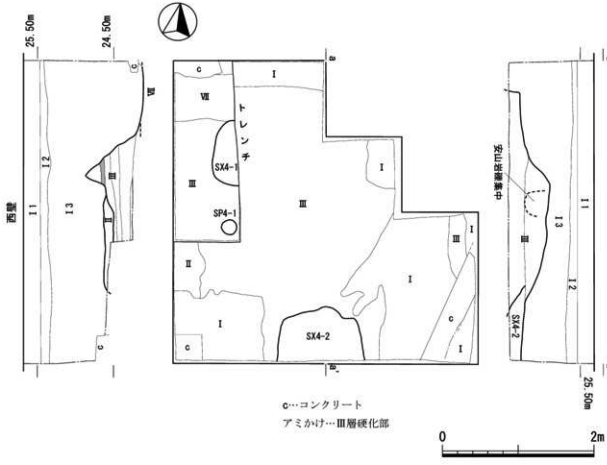
第18図　3区実測図（1／50）

掘り下げてはいないものの、Ⅱ層下部に2区において検出されたSB01の延長が残存する可能性が高い。

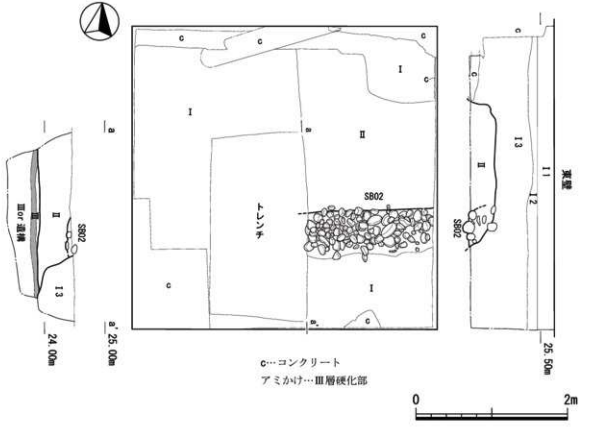
6区－平成25・27年度調査－（第21図）

本区は現状床面下110cmにて掘り止めている。

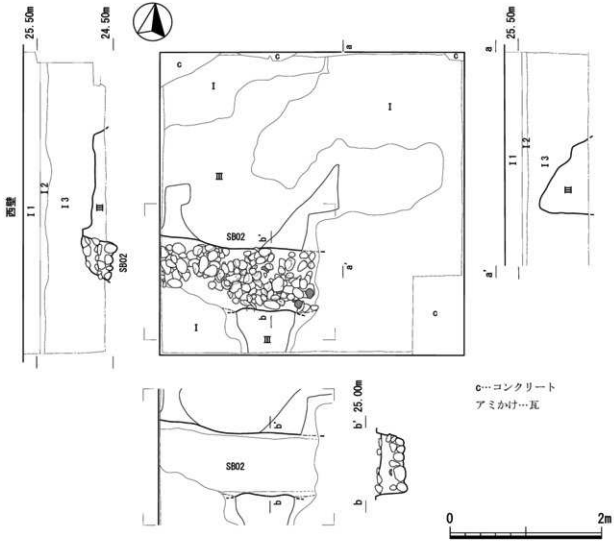
SB02は、本区においてはⅢ層を掘り込んでおり、掘り込みの幅は80～85cmである。方位はN-85°-Eを示し、5・7区に延びている。掘り込み内には10～15cm大を主体とする安山岩転礫の他、少量の瓦片が込められている。断面をみると、転礫が集中する部分と、締りの強い暗褐色土が基質となり転礫が少ない部分とが交互に認められ、転礫は下位において特に集中している。壁・基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。



第19図　4区実測図（1／50）



第20図　5区実測図（1／50）



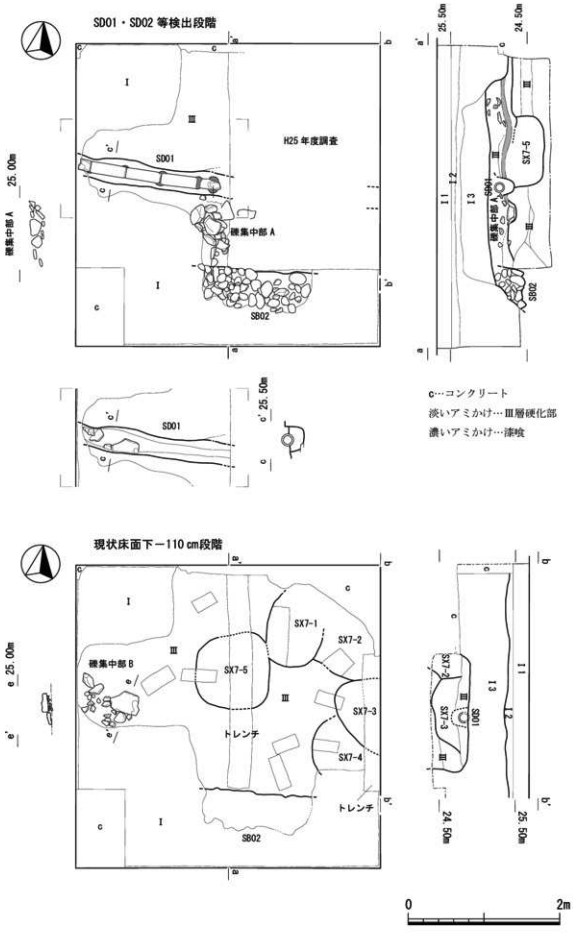
第21図　6区実測図（1／50）

7区－平成25・27年度調査－（第22図）

本区は現状床面下110cmにて掘り止め、南北方向のトレンチを2本設けている。

遺構は、Ⅲ層上位から掘り込まれるSD01・SB02、Ⅲ層上位（部分的に硬化を伴う整地層）が被覆するSX7-1～5の他、Ⅲ層上位において根固め石とみられる礫の集中部を2箇所（A・Bと呼称）検出している。

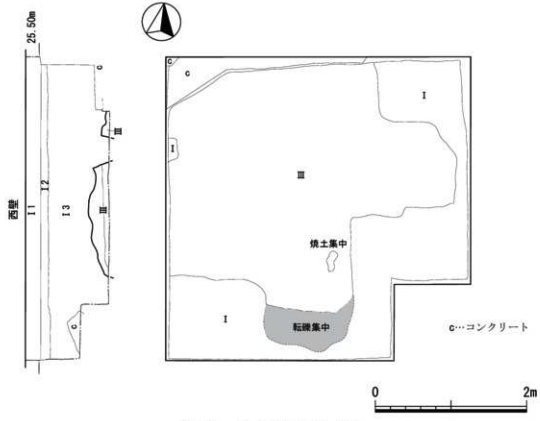
SD01は、方位N-88°-Wを示し、本区外に延びているが、隣接する6・8区ではⅠ層により破壊されている。掘り込みは横断面U字形、上端幅25～34cmで、埋土は暗褐色土を基質とする。瓦質の土管を埋設し、連結部を漆喰により目張りしている。SB02は、方位N-85°-Eを示し、西側の5・6区に延びている。下位において10～15cm大を主体とする安山岩転礫が集中しており、壁・基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。SX7-1～5は、掘り止め面（現状床面下110cm）において上面確認を行なったものである。埋土は暗褐色土で、地山（Ⅲ層）との弁別が難しかったことから、小トレンチを設けながら遺構として認定している。礫集中部Aは、SD01・SB02とほぼ同じ高さで検出している。安山岩砕石（主体）とコンクリート片が集中し、下位には瓦片が敷かれたようにまとまっている。瓦片下部の土が締ることから、意図的に据えたものと考えられる。断面観察a-a'において緩やかな窪みが確認されたが、平面観察では掘り込みは捉えられなかった。礫集中部Bは、凝灰岩礫を主体とし、安山岩礫・瓦小片・陶磁器片が認められるもので、掘り止め面（現状床面下110cm）下部に続いている。凝灰岩礫には板状に整形し、コンクリートが付着するものがあり、本来、近代の構造物部材であったと判断される（第51図119）。



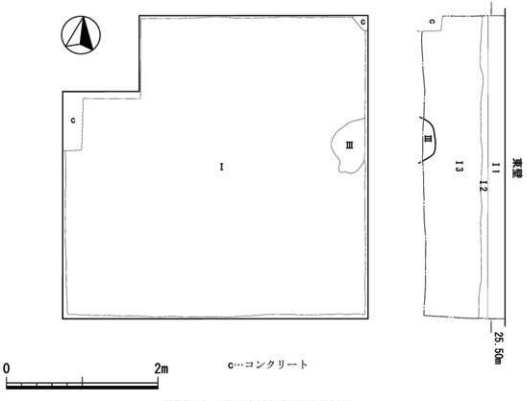
第22図　7区実測図（1／50）

8区－平成27年度調査－（第23図）

本区は現状床面下110cmにて掘り止めている。5～7区において検出されたSB02は、本区ではⅠ層により破壊されているが、その延長部分において転礫が集中する箇所があり、本来の存在状況が窺われる。



第23図　8区実測図（1／50）



第24図　9区実測図（1／50）

9区－平成27年度調査－（第24図）

現状床面下110cmにて掘り止めている。小範囲でⅢ層が認められたものの、大部分はⅠ層を検出したのみである。

10区－平成27年度調査－（第25図）

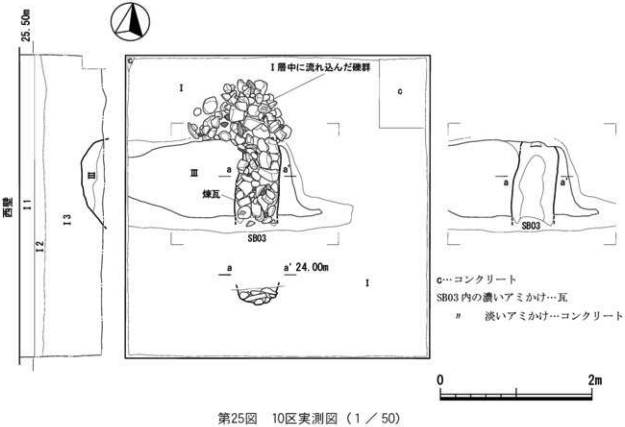
本区は現状床面下110cmにて掘り止めている。

SB03はⅢ層を掘り込んでおり、本区においては南北方向（N-4°-W）に伸びている。上端幅は50～55cmで、基底は北側がテラスを持ちつつ緩やかに立ち上がっている。同一遺構と捉えられ、直角方向（東西）に伸びる11・12区SB03よりも幅狭で、基底レベルも高い。掘り込み内には10～30cm大の安山岩転礫・砕石が集中し、その他、瓦片・煉瓦片・コンクリート塊が込められている。埋土はオリーブ黒色砂である。基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが認められる。なお、本址に北接するⅠ層中においても流れ込んだとみられる安山岩礫等の集中が認められる。

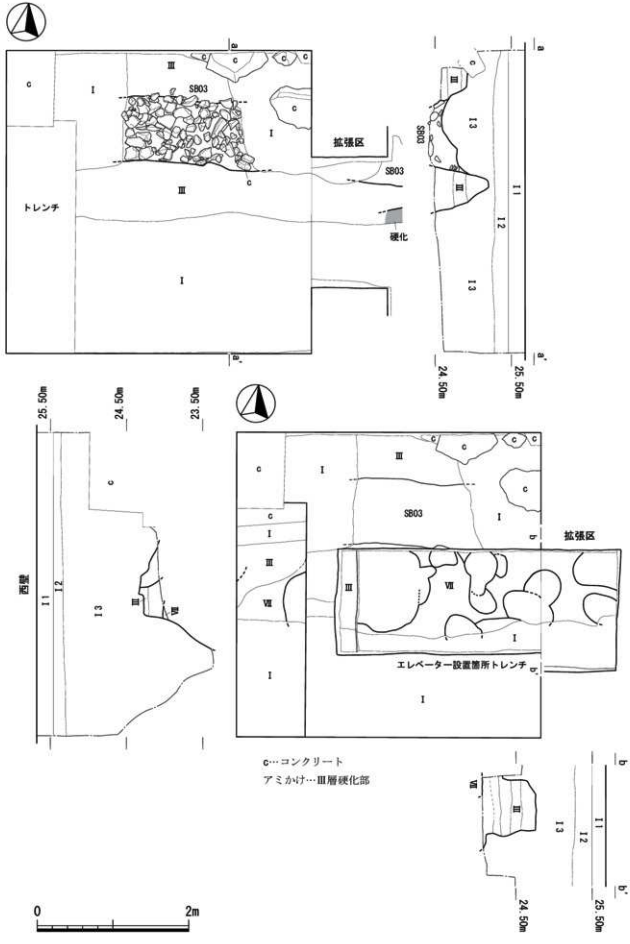
11区・拡張区－平成25・27年度調査－（第26図）

原則、現状床面下110cmにて掘り止めているが、西壁際のトレンチ部分、エレベーター設置工事予定箇所のうち近代以前の土層に影響が及ぶ部分については深掘りを行なっている。エレベーター設置箇所は11区とこれに東接する1m幅の拡張区（地中梁撤去後に調査）が対象であり、工事による掘削深度を考慮し、現状床面下160cmまで掘り下げている。

SB03は、Ⅲ層を掘り込み、上部はⅠ3層によって掘り込まれるように壊されている。博物館本館建設工事の際の基礎撤去の状況を示すものとみられる。方位はN-85°-Eを示し、上端幅（平面確認段階）は80～90cmである。掘り込み内下位には5～15cm大を主体とする安山岩砕石・転礫が集中し、その他、コンクリート塊が込められている。埋土は暗褐色土で、締りはやや弱い。トレンチ・エレベーター設置箇所はⅦ層上面まで掘り下げ、土坑状・柱穴状の遺構を検出している。埋土はいずれも暗褐色土を基質とする。



第25図　10区実測図（1／50）

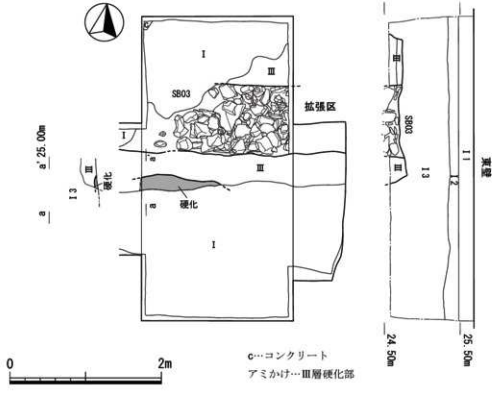


第26図　11区・拡張区実測図（1／50）

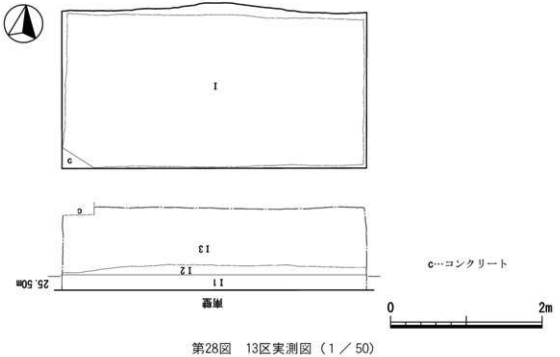
12区・拡張区－平成27年度調査－（第27図）

現状床面下110cmにて掘り止めている。拡張区は建物扉に伴う構造物の撤去後に調査したものである。

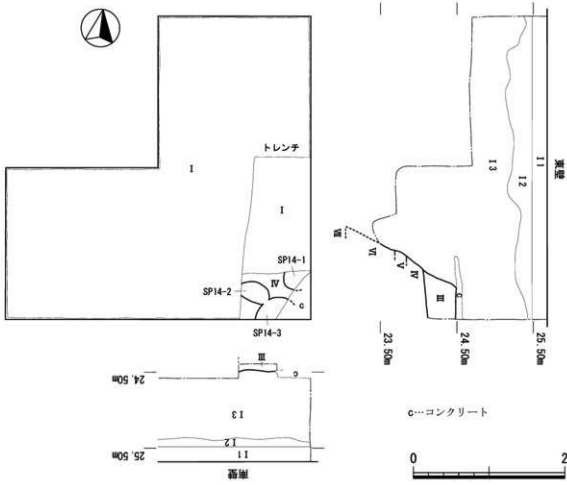
SB03はⅢ層を掘り込み、Ⅰ層により削平されている。方位はN-84°-E、上端幅は90～94cmである。掘り込み内には10～20cm大を主体とする安山岩砕石・転礫が集中し、その他、軟質砂岩ブロックが込められている。埋土は、暗褐色土を基質とする部分と安山岩砕粒を基質とする部分とがみられる。その他、Ⅲ層中（掘り止め面付近）において硬化面を検出している。



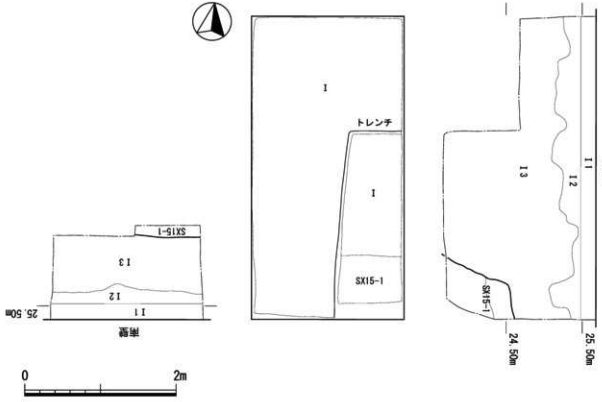
第27図　12区・拡張区実測図（1／50）



第28図　13区実測図（1／50）



第29図　14区実測図（1／50）



第30図　15区実測図（1／50）

13区－平成27年度調査－（第28図）

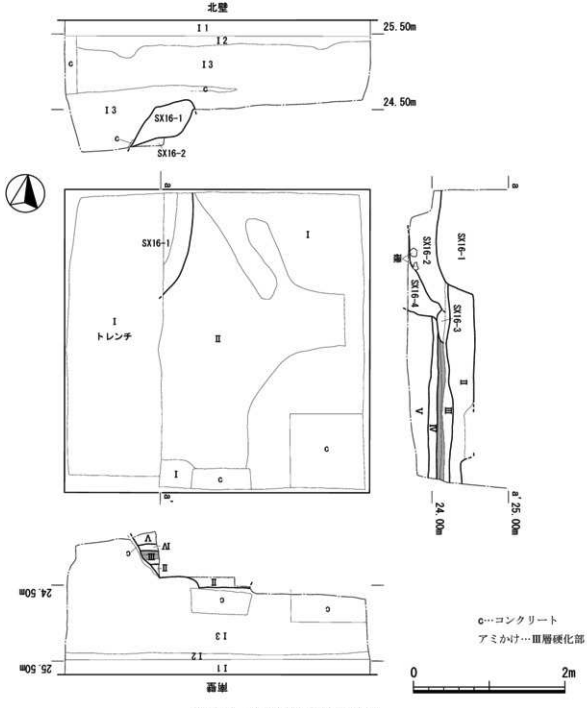
14・15区の成果から、北側は地下ダクト工事により大きく撹乱されていると判断されたため、北側２ｍは未調査である。現状床面下110cm にて掘り止め、Ⅰ層のみを検出している。

14区－平成25・27年度調査－（第29図）

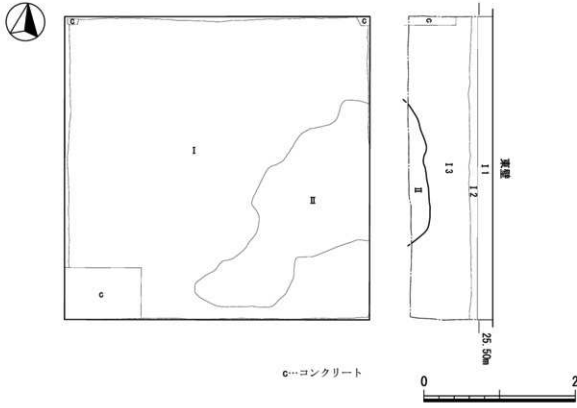
現状床面下110cm においてはⅠ層を検出したのみであり、東壁際にトレンチを設け、地下ダクト工事による撹乱と土層の残存状況を捉えている。Ⅳ層上面において SP14-1 ～ 3を検出し、これらの埋土は暗褐色を基質とする。

15区－平成25・27年度調査－（第30図）

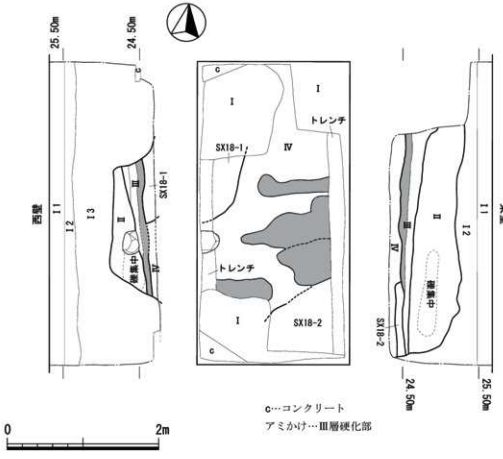
現状床面下110cm においてはⅠ層を検出したのみであり、東壁際にトレンチを設け、地下ダクト工事による撹乱と土層の残存状況を捉えている。



第31図　16区実測図（1／50）



第32図　17区実測図（1／50）



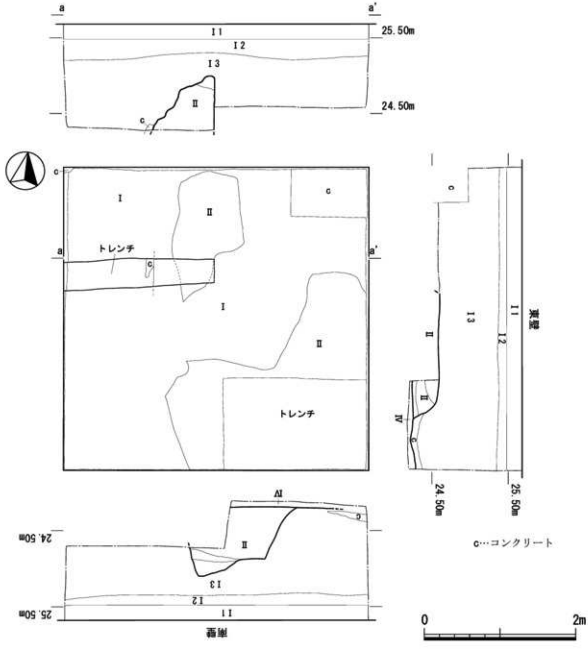
第33図　18区実測図（1／50）

トレンチ内において認められた暗褐色土層は、平面・断面ともに掘り込みラインは確認されていないものの、西隣する14区における自然堆積土層の標高との対比からⅣ層を掘り込む遺構とみられ、加えて、多量の瓦片（23.95kg）の他、陶磁器類、大型魚類・鳥類等の動物骨片、ハマグリ・アサリ等の貝殻片を含むことから廃棄土坑の可能性が指摘できる。SX15-1と呼称している。

16区－平成25年度調査－（第31図）

Ⅲ層下位は、薄く縞状に細分される堆積状況、締りの状況から硬化を伴う整地土と判断される。

遺構は、Ⅱ層上面において SX16-1を、昭和50年度の本館地下室工事に伴う撹乱壁を垂直に切り下げたトレンチ東側断面（a-a'）において SX16-2 ～ 4を検出している。SX16-1の埋土は火砕流土ブロックを多量に含む。SX16-2 ～ 4はⅢ層下位の整地土を掘り込んでおり、埋土は暗褐色土を基質とする。なお、本区西側（トレンチ部分）は地下室工事により深く撹乱されている。



第34図　19区実測図（1／50）

17区－平成27年度調査－（第32図）

現状床面下110cmにて掘り止めている。Ⅱ層が認められたものの、大部分はⅠ層を検出したのみである。Ⅱ層からはやや多量の安山岩礫・凝灰岩礫・瓦片が出土している。

18区－平成25年度調査－（第33図）

本区はⅣ層上面まで掘り下げ、東西両壁際に南北方向のトレンチを設けている。

Ⅱ層は安山岩礫・凝灰岩礫を極多く、瓦片を多く含んでおり、特に土層断面図破線部において集中する。瓦片には近代瓦が認められる。Ⅲ層下位には締りが極強い硬化土があり、直下のⅣ層上面において、この硬化土下位の緩やかな凹凸が縞状に認められる。

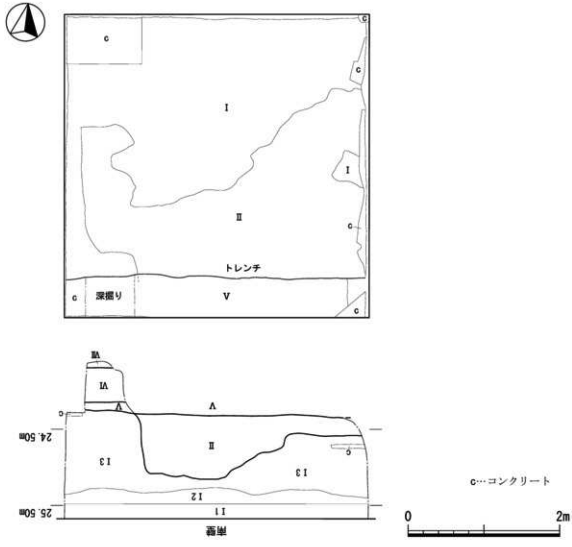
遺構は、Ⅲ層に削平され、Ⅳ層を掘り込むSX18-1・2を検出している。埋土は暗褐土で、SX18-2は上部の硬化土の影響のためであろう、締りが強い。

19区－平成25・27年度調査－（第34図）

現状床面下110cmにて掘り止め、部分的にトレンチを設けている。Ⅱ層が認められたものの、大部分はⅠ層を検出したのみである。西側は昭和50年度の博物館本館地下室工事により深く撹乱されている。

20区－平成25・27年度調査－（第35図）

現状床面下110cmにて掘り止め、南壁際にトレンチを設けている。Ⅱ層下位には安山岩礫がやや多く含まれ、他、近代の瓦片も認められる。



第35図　20区実測図（1／50）

21区－平成25年度調査－（第36図）

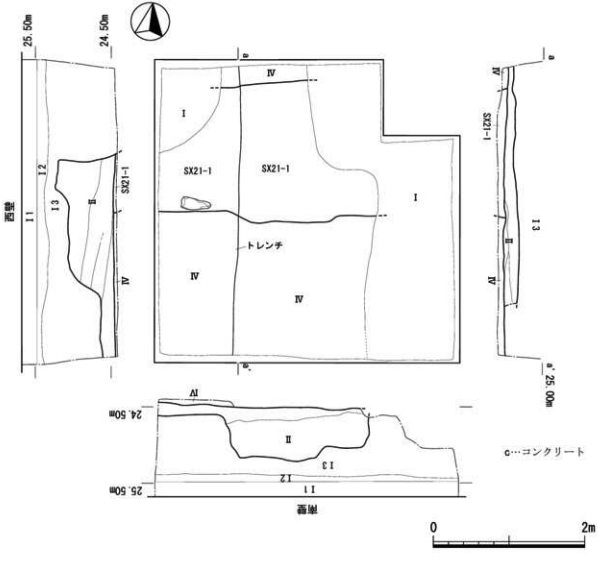
本区はⅣ層上面まで掘り下げ、西壁際に浅いトレンチを設けている。

Ⅱ層においては、北隣する18区ほどではないものの、安山岩礫・凝灰岩礫を多く含む。SX21-1は、Ⅳ層を掘り込みⅡ層が被覆している。埋土は暗褐色土で、安山岩礫・凝灰岩礫を含む。平面プランは東西方向に伸びる溝状を呈するが、検出当初は複数の土坑状の遺構が重複したものと捉えており、その可能性もある。本区のみの検出であること、掘り下げを行なっていないことから、上記の判別は難しい。

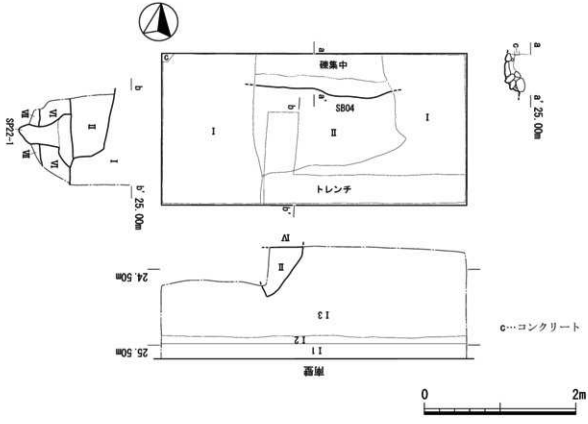
22区－平成25・27年度調査－（第37図）

本区は、Ⅱ層残存部分については現状床面下110cmにて掘り止め、南壁際にL字形のトレンチを設けている。本区西側は昭和50年度の地下室工事により深く撹乱されており、これは北側の16・19区から連続して確認されるものである。

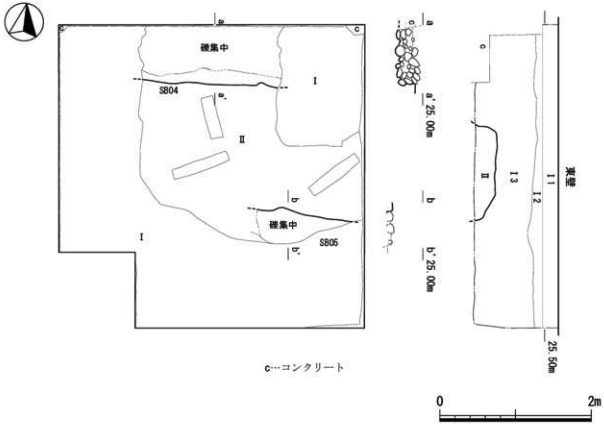
遺構は、Ⅱ層を掘り込むSB04、Ⅱ層が被覆しⅥ層を掘り込むSP22-1を検出している。SB04は方位N-86°-Eを示し、東側の23・24区に延びる。掘り込み内には10～15cm大を主体とする安山岩転礫が集中する他、煉瓦片がみられ、その間にオリーブ黒色砂を充填している。基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。南北方向のトレンチ東壁断面にて検出したSP22-1は、埋土は暗褐色土を呈し、掘り込み上位の幅広い部分は抜き取り痕跡の可能性がある。



第36図　21区実測図（1／50）



第37図　22区実測図（1／50）



第38図　23区実測図（1／50）

23区－平成27年度調査－（第38図）

現状床面下110cm、Ⅱ層中にて掘り止めている。

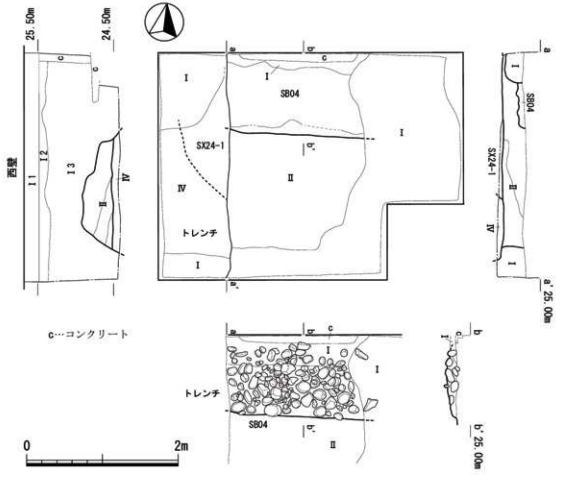
Ⅱ層は部分により混入物の多寡等の差から斑状のラインが認められ、これについて、当初は掘り込み等の可能性を考慮したが、小トレンチを設けⅡ層のバリエーションであることを確認している。

SB04・05はⅡ層を掘り込んでおり、SB04はⅡ層上面において検出し、SB05は上部に薄くⅡ層上位土が被覆するためSB04よりもやや低いレベルにて検出している。ともに掘り込み内に10～15cm大を主体とする安山岩転礫が集中し、オリーブ黒色砂を充填している。SB04は方位N-85°-Eを示し、22・24区に延びる。基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。SB05は方位N-90°-E・Wを示す。本区のみの部分的な検出である。

24区－平成25・27年度調査－（第39図）

現状床面下110cmにて掘り止め、西壁際にトレンチを設けている。

遺構は、Ⅱ層を掘り込むSB04、Ⅳ層を掘り込みⅡ層が被覆するSX24-1を検出している。SB04は、上端幅約100cmと想定され、方位はN-86°-Eを示す。掘り込み内には10～20cm大を主体とする安山岩転礫が集中する他、コンクリート片がみられ、オリーブ黒色砂を充填している。基底面は填圧によってめり込んだ礫のスタンプが著しい。トレンチ内にて検出したSX24-1は、埋土基質はⅣ層との差異が乏しいものの、上面に安山岩小礫が疎らに認められるものである。



第39図　24区実測図（1／50）

（３）屋外調査－空調屋外機・目隠し塀設置予定域－（第40図）

屋外１区－平成25年度調査－

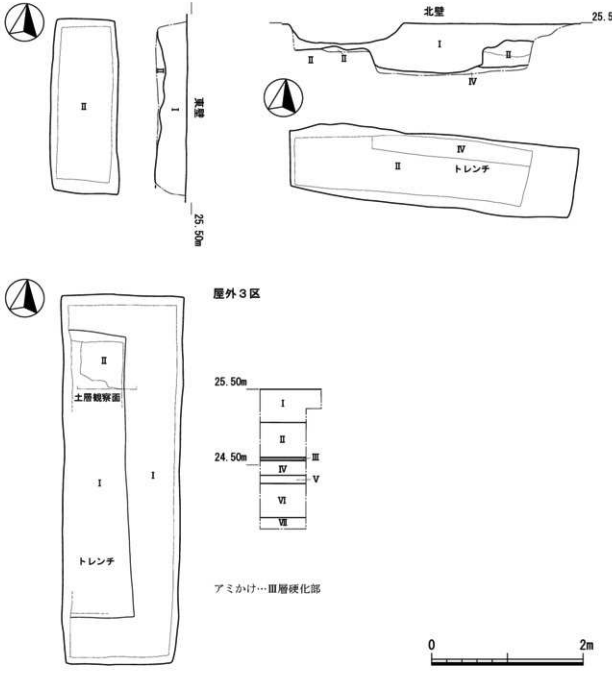
幅90cm ×長さ230cm 規模の調査区である。現地表面下40cm にて掘り止め、Ⅱ層を検出している。

屋外２区－平成25年度調査－

幅90c 前後×長さ320cm 規模の調査区である。現地表面下約25cm においてⅡ層を検出し、北壁際のトレンチ基底付近においてⅣ層を検出している。

屋外３区－平成25年度調査－

幅155前後×長さ485cm 規模の調査区である。現地表面下30cm にて掘り止め、西壁際にトレンチを設けている。トレンチは部分的に深掘りしてⅡ～Ⅶ層を確認しており、うちⅢ層は硬化土である。



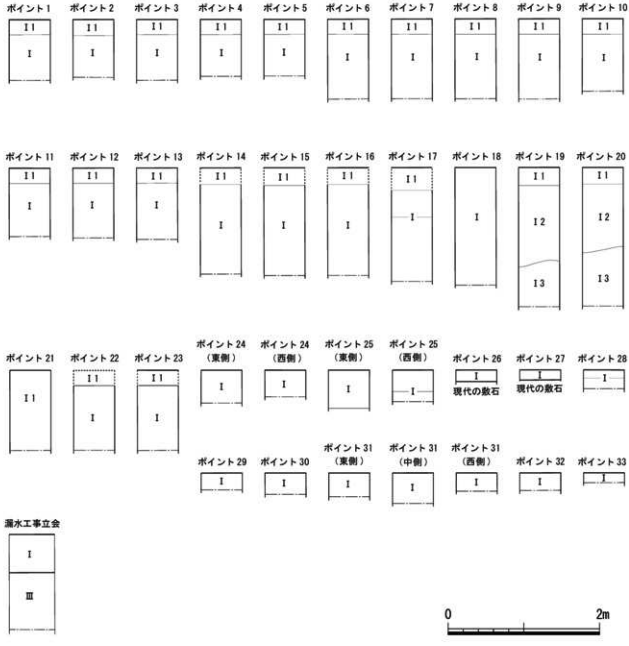
第40図　屋外１～３区実測図（１／50）

c．工事立会（第41・42図，第３表）

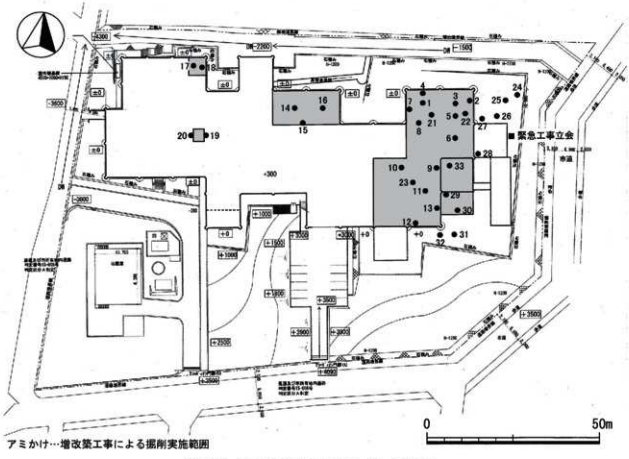
平成27年12月21日～平成28年３月８日、増改築工事による掘削・既存構造物の撤去に伴って工事立会を行なった。結果、断面にて確認した土層は全てⅠ層で、現状保存の対象となる明治時代初期（西南戦争頃）以前の土層・遺構への影響は無いものと判断した。33箇所において土層柱状図を作成するとともに、掘削土中から遺物を採集している。なお、調査の期日・工事内容は第３表に記している。

d．緊急工事立会（第41・42図，第３表）

平成27年１月21・22日、本館建物東側の屋外展示域において、水道管本管の漏水改修に伴う緊急工事立会を行なった。掘削は、小型重機により幅60～70cm、長さ250cm、深さ85～125cm の規模で行ない、漏水箇所を検出したものである。止水後、壁面の土層観察を行ない、工事による掘削がⅢ層までに収まること、明確な遺構は存在しないことを確認するとともに、掘削土中から遺物を採集している。



第41図　工事立会土層柱状図（１／50）



第42図　工事立会地点位置図（1／1,100）

第３表　工事立会調査一覧表

ポイントNo.	期日	工事内容	掘削深	ポイントNo.	期日	工事内容	掘削深
ポイント1	2015.12.21	旧理工旧理工展示室地中梁撤去	80	ポイント20	2016.03.08	地下1F エレベーターピット基礎掘削	182
ポイント2	2015.12.21	旧理工展示室地中梁撤去	76	ポイント21	2016.02.16	旧理工展示室基礎床掘り	105
ポイント3	2015.12.21	旧理工展示室地中梁撤去	80	ポイント22	2016.02.18	旧理工展示室基礎床掘り	105
ポイント4	2015.12.22	旧理工展示室地中梁撤去	75	ポイント23	2016.02.18	旧理工展示室基礎床掘り	105
ポイント5	2015.12.22	旧理工展示室地中梁撤去	75	ポイント24東側	2016.02.26	屋外展示物撤去	43
ポイント6	2015.12.25	旧理工展示室地中梁撤去	105	ポイント24西側	2016.02.26	屋外展示物撤去	35
ポイント7	2015.12.25	旧理工展示室地中梁撤去	105	ポイント25東側	2016.02.26	屋外展示物案内板撤去	50
ポイント8	2015.12.25	旧理工展示室地中梁撤去	105	ポイント25西側	2016.02.26	屋外展示物案内板撤去	41
ポイント9	2015.12.28	旧理工展示室地中梁撤去	105	ポイント26	2016.02.26	屋外展示物基礎撤去	15
ポイント10	2015.12.28	旧理工展示室地中梁撤去	95	ポイント27	2016.02.26	屋外展示物基礎撤去	13
ポイント11	2015.12.28	旧理工展示室地中梁撤去	92	ポイント28	2016.02.26	屋外照明基礎撤去	25
ポイント12	2016.01.06	旧理工展示室地中梁撤去	92	ポイント29	2016.02.26	屋外照明基礎撤去	22
ポイント13	2016.01.06	旧理工展示室地中梁撤去	94	ポイント30	2016.02.26	屋外展示物案内板撤去	28
ポイント14	2016.02.09･10	展示室基礎床掘り	140	ポイント31東側	2016.02.26	屋外展示物・案内板撤去	31
ポイント15	2016.02.09･10	展示室基礎床掘り	142	ポイント31中側	2016.02.26	屋外展示物・案内板撤去	40
ポイント16	2016.02.09･10	展示室基礎床掘り	142	ポイント31西側	2016.02.26	屋外展示物・案内板撤去	24
ポイント17	2016.02.08	トイレピット基礎掘削	150	ポイント32	2016.02.26	屋外照明基礎撤去	23
ポイント18	2016.02.08	トイレピット基礎掘削	155	ポイント33	2016.03.08	屋外敷石撤去	13
ポイント19	2016.03.04	地下1F エレベーターピット基礎掘削	183	緊急工事立会	2015.01.21･22	漏水改修工事	125

※掘削深…床・地表面からの深さ，単位 cm

2．出土遺物（第43～54図，第４～９表）

観察表をもって記す。

第４表　出土陶磁器・土器類観察表

博物館本館増改築工事に伴う調査出土

図-No.	実測No.	出土位置	焼成形態	器種	計測値（単位 cm，括弧内復元値）	産地	時期	備考
43-1	120	7区 SD01	瓦質	土管	継手部（玉縁）口径11.4，筒部上端部径15.0，筒部下端部径14.9，全長49.0	在地？	19c 末頃	外側面ナデ，継手部端面・筒部下端面ヘラケズリ後ナデ，内側面布目・鉄線切り，内面下端部面取り（ケズリ）
43-2	121	7区 SD01	瓦質	土管	継手部（玉縁）口径11.2，筒部上端部径14.3，筒部下端部径15.0，全長46.9	在地？	19c 末頃	外側面ナデ，継手部端面・筒部下端面ヘラケズリ後ナデ，内側面布目・鉄線切り，内面下端部面取り（ケズリ）
43-3	122	7区 SD01	瓦質	土管	継手部（玉縁）口径11.6，筒部上端部径14.4，筒部下端部径14.5，全長46.8	在地？	19c 末頃	外側面ナデ，継手部端面・筒部下端面ヘラケズリ後ナデ，内側面布目・鉄線切り，内面下端部面取り（ケズリ）
43-4	119	7区 SD01	瓦質	土管	筒部下端部径12.3	在地？	19c 末頃	外側面ナデ，筒部下端面ヘラケズリ後ナデ，内側面布目・鉄線切り，内面下端部面取り（ケズリ）
43-5	72	2区 SB01上面	磁器染付	香炉	口径（7.0），底径2.9，器高5.3	肥前系	18c 末～19c 中頃	外面簡略化した龍文
43-6	28	6区 SB02	白磁	紅皿	口径（5.0），高台径1.5，器高1.5	肥前系	18c 後半～19c 中頃	型成形，外面貝殻状文
43-7	16	10区 SB03	素焼き	煎瓦	全形寸法 幅～11.4，厚6.5	在地？	明治・大正期	胎土明赤褐色，表面色調はやや白濁，型成形（表面平滑），1面のみ（図表面）粗いナデ
43-8	70	SX1-6	陶器鉄絵	碗	口径（10.0）	関西	17c 後半～18c 前半	胎土長石粒多い，文様は白土＋鉄絵
44-9	69	SX1-6	磁器染付	広東碗蓋	口径（10.2），つまみ径5.6，器高2.2	肥前	1780～1840年代	外面草花文，内面見込み鶴文
44-10	71	SX1-6	磁器染付	仏飯	口径（7.9），脚台径4.6，器高5.5	肥前	18c 前半	外面桐文（コンニャク印判）
44-11	22	SX1-1・6	陶器	擂鉢	口径（16.0），底径6.2，器高6.2	肥前	17c 後半	小形，口縁部玉縁状・鉄釉
44-12	19	SX1-1・6	土師質	焙烙	口径（49.9）	在地	19c 初頭～中頃	端反碗・小丸碗と共伴する把手型式，外面体部ヘラケズリ，内面横ナデ，外面煤付着
44-13	21	SX1-1・6	陶器	土瓶蓋	口径7.6，最大径10.8，器高3.3	九州	18c 末～19c 中頃	胎土橙色，鉄釉（柞せて白濁・割薄），外面墨書「弥」
44-14	74	SX2-5	磁器染付	碗	口径10.1，高台径3.4，器高4.4	波佐見	18ｃ第3四半	外面文様雪持ち笹・梅樹，内底絵の目釉調ぎ＋アルミナ塗付
44-15	24	2区 遺構上面	陶器	鉢	口径（25.3），高台径10.0，器高11.3	肥前	18c 中頃～後半	高台外側面削り大きい，鉄釉，口縁部上面釉拭き取り
44-16	85	7区 瓶集中B	陶器	碗	口径（13.8），高台径（4.4），器高5.8	肥前	17c 後半～18c 初頭	白土打刷毛目・灰釉，高台部露胎
44-17	84	SX7-1	磁器染付	輪花皿	口径（14.4），高台径8.6，器高4.3	塩田	19c 初頭～中頃	蛇の目凹形高台，内面白化粧・海浜風景文，口紅
44-18	81	SX7-1	磁器染付	輪花小皿	口径8.9，高台径3.6，器高2.5	肥前系	18c 末～19c 中頃	内面草花文・三足ハマ跡
44-19	82	SX7-1	磁器染付	紅猪口	口径6.3，高台径2.2，器高2.6	肥前系	18c 後半～19c 初頭	胎土灰色味、外面笹文，高台内棚砂付着
45-20	83	SX7-1	磁器染付	仏飯	口径5.6，脚台径3.5，器高5.4	肥前	18c	胎土黄ばむ，外面蜻蛉草文
45-21	31	SX7-1	陶器	壺	口径（12.5），高台径6.6，器高11.8	肥前	18c 末～19c 中頃	内外面鉄釉，外面体部下位～高台部棚砂付着（砂敷き窯詰め法）
45-22	32	SX7-5	白磁	小坏	口径（6.0），高台径2.6，器高4.3	肥前	17c 末～18c 中頃	高台畳付棚砂付着
45-23	103	SX15-1	磁器染付	端反小碗	口径（8.6），高台径（3.2），器高5.2	肥前系	1820～1860年代	外面文様折梅・根上り松，内面文様雷・松竹梅円形
45-24	102	SX15-1	磁器染付	小坏	口径（7.4），高台径2.9，器高4.1	肥前系	1820～1860年代	外面図案化した文字文（清朝の影響）
45-25	104	SX15-1	磁器色絵	小坏	口径7.7，高台径3.4，器高3.4	瀬戸美濃	19c 中頃	江戸絵付，内面文様七宝繋ぎ・八坂の塔・「泉都八坂塔景」銘，上絵は瘤・金色
45-26	49	SX15-1	陶器	土瓶蓋	口径5.9，最大径8.8，器高3.1	薩摩	18c 末～19c 中頃	上面土灰釉，受部（露胎部）煤付着
45-27	50	SX15-1	土師器	小皿	口径6.2，底径3.8，器高1.1	在地？	19c 中頃？	器壁薄い形態，内面～外面体部回転ナデ，外底糸切り離し，油煙付着顕著
45-28	101	SX15-1	磁器染付	蜆徳利	口径2.7，高台径6.3，器高18.7	肥前系	19c 中頃	外面束堀山水文
45-29	100	SX15-1	磁器染付	蜆徳利	口径2.8，高台径6.7，器高20.3	肥前系	19c 中頃	外面表側水辺の草花文（河骨？），裏側蝶文
45-30	86	7区 瓶層下位	磁器染付	碗蓋	口径8.8，つまみ径3.2，器高2.5	肥前	18c 前半	外面文様雨降り柳・雲・雷，つまみ内「大明年製」銘
45-31	77	3区	磁器染付	碗蓋	口径9.8，つまみ径3.9，器高2.6	肥前	18c 中頃	外面文様遠山・銀杏，内面文様四方博・寿字
45-32	56	24区Ⅱ層	青磁	碗蓋	口径（9.9），つまみ径（4.1），器高2.5	肥前系	18c 後半～19c 初頭	胎土灰色味
45-33	60	廃土	白磁	碗蓋	口径（9.2），つまみ径4.0，器高1.8	肥前系	19c 中頃～20c 初頭	輪状つまみ
45-34	62	廃土	青磁	小坏蓋	口径6.0，つまみ径2.6，器高1.9	肥前	18c 後半～19c 初頭	胎土灰色味、釉発色淡い

図-№	実測№	出土位置	焼成形態	器種	計測値（単位 cm，括弧内復元値）	産地	時期	備考
45-35	109	17区Ⅱ層	磁器染付	広東碗	口径（11.3），高台径5.0，器高5.7	景田？	19c 第2・3四半	外面文様帆掛け舟，内底文様不明，内面下位絵の目釉剥ぎ・アルミナ塗付，高台部下位釉懸れ（景田焼の特徴）
45-36	98	15区	磁器染付	端反碗蓋	口径9.2，つまみ径3.7，器高2.9	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面格子文，内面見込み岩波文
45-37	117	工事立会	磁器染付	端反碗蓋	口径9.2，つまみ径（3.5），器高2.9	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面龍文，内面連続弧文・岩波文
46-38	26	3区	陶器	碗	口径9.8，高台径3.8，器高4.1	内野山	18c 前半	灰釉，内底蛇の目釉剥ぎ
46-39	55	23区Ⅰ層	陶器	碗	破片	龍門司？	18c 末～ 19c	白化粧＋透明釉・鋼縁釉（流し掛け）
46-40	59	廃土	陶器	碗	口径（9.6），高台径（3.7），器高5.3	萩	18c 末～ 19c	瀛白釉，体部下位露胎
46-41	95	11区Ⅰ・Ⅱ層	磁器染付	碗	口径（10.4），高台径3.7，器高5.9	波佐見	17c 末～ 18c 前半	外面風景文（建物あり），高台内「大明年製」銘，高台部施釉懸
46-42	112	廃土	磁器染付	碗	口径（9.9），高台径（4.1），器高6.0	波佐見	17c 末～ 18c 前半	外面草花文，高台内「大明年製」銘
46-43	76	2区	磁器染付	碗	口径（9.8），高台径3.5，器高5.8	波佐見	17 c 末～ 18 c 前半	胎土灰色味，外面半菊花文
46-44	115	廃土	磁器染付	碗	口径10.9，高台径4.0，器高6.1	肥前	17c 末～ 18c 前半	外面七宝繋ぎ文，内面文様四方襷・楓
46-45	96	14区	磁器染付	碗	口径10.0，高台径4.2，器高5.4	肥前	1690年代～ 18c 前半	外面上り藤文（コンニャク印判），外面下位貫入目立つ
46-46	87	10区Ⅰ層	磁器染付	碗	口径（9.8），高台径4.5，器高5.2	肥前	18c 前半	外面楼閣山水文，高台内渦福銘
46-47	44	11区Ⅰ層	白磁	小碗	口径7.4，高台径3.2，器高4.6	肥前	17c 後半～ 18c 初頭	釉表面ピンホール目立つ
46-48	88	10区Ⅰ層	磁器染付	小碗	口径（7.7），高台径3.3，器高4.7	肥前	18c 前半	外面菊花文（コンニャク印判）
46-49	89	10区Ⅰ層	磁器染付	小碗	口径（7.4），高台径3.0，器高5.0	肥前	1690年代～ 18c 前半	外面文様三つ巴・草（コンニャク印判）
46-50	78	3区	磁器染付	筒形碗	口径（7.7），高台径3.6，器高6.2	肥前	1780 ～ 1810年代	外面文様雲輪・宝，内面文様四方襷・コンニャク五弁花
46-51	106	17区Ⅰ層	磁器染付	端反碗	口径（10.6），高台径（3.7），器高5.8	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面虫籠文，内面青海波・草文，高台部下位アルミナ付着
46-52	97 b	14区	磁器染付	端反碗	口径（9.8），高台径3.8，器高5.5	肥前系	1820 ～ 1860年代	内外面とも格子文，呉須暗灰色雲びら，高台畳付釉剥ぎ雑・櫛砂付着
46-53	107	17区Ⅰ層	磁器染付	端反碗	口径（9.6），高台径3.7，器高5.7	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面斜格子文，内底花文，高台内側面アルミナ付着
46-54	118	工事立会	磁器染付	小丸碗	口径（6.8），高台径3.3，器高5.2	肥前系	1820 ～ 1860年代	東屋山水文
46-55	97a	14区	磁器染付	小丸碗	口径（6.3），高台径（3.5），器高5.5	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面丸文（薄）
46-56	79	7区Ⅰ層	磁器染付	小丸碗	口径（6.8），高台径3.5，器高5.9	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面松加文
46-57	99	15区	磁器染付	小丸碗	口径（6.1），高台径3.1，器高5.5	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面編編・縦縞文
46-58	91	11区	磁器染付	小丸碗	口径（6.5），高台径3.2，器高5.0	肥前系	1820 ～ 1860年代	外面格子文（滲む）
46-59	92	11区	磁器染付	碗	口径（9.4），高台径2.9，器高4.1	瀬戸美濃	1820 ～ 1860年代	外面指上り松文
46-60	30b	6区Ⅱ層	白磁	湯呑碗	高台径（3.4）	不明	19c 末？～ 20c 前半	定型化した軍用食器，泥質流し込み成形，胎土白色・光沢感，高台部下位アルミナ付着
47-61	53	20区Ⅱ層	陶器	皿	高台径4.3	朝鮮王朝	16c	胎土は硬質・淡灰色（白色粒混入），釉は明るい緑灰色，内外面とも砂目（3箇所）
47-62	111	23区Ⅱ層	磁器青花	大皿		漳州窯系	16c 末～ 17c 初頭	内外面白化粧，内面窓内宝相華唐草文
47-63	116	廃土	磁器染付	皿	口径（12.5），高台径（4.0），器高3.8	波佐見	18c 後半～ 19c 初頭	内面粗い斜格子文，内底蛇の目釉剥ぎ，高台部下位アルミナ付着
47-64	108	17区Ⅰ層	磁器染付	輪花小皿	口径10.0，高台径5.8，器高2.3	塩田	19c 初頭～中頃	内面白化粧・海浜風景文，口紅
47-65	41	11区	白磁	皿	口径（12.2），高台径（7.1），器高2.5	瀬戸美濃	19c 後半	木型打ち込み成形，内底玉取獅子文・蕎麦，内面に化学コバルト小疵（蛾漆状）
47-66	61	廃土	白磁	紅皿	口径（5.9），高台径（2.6），器高1.6	肥前系	19c 中頃	型成形，外面蜻蛉草文陽刻
47-67	27	5区	陶器	灯火皿	口径7.6，受部径（11.7），底径5.0，器高2.0	関西系	19c 中頃	受台皿，灰釉・貫入目立つ，外面体部～底部（露胎）煤付着
47-68	40	11区Ⅰ層	土師器	小皿	口径8.4，底径4.6，器高1.5	在地？	18c ～ 19c	色調淡い（淡橙色）・器壁薄い形態，外底糸切り離し・板目，油煙認められず
47-69	23	2区	陶器	小坏	口径（7.9），高台径3.4，器高3.6	肥前	18c 前半	鉄釉
47-70	75	2区	磁器染付	小坏	口径（5.7），高台径2.1，器高5.5	肥前	17c 末～ 18c 前半	外面松原文（型紙摺り），内面紅付着
47-71	30a	6区Ⅱ層	白磁	小坏	口径（4.7），高台径3.2，器高3.1	肥前	18c 後半～ 19c 初頭	小形の猪口
47-72	42	11区Ⅲ層下位	陶器	坏台？	口径4.2，底径2.3，器高1.8	肥前？	不明	外底以外は光沢が無い薄い施釉（灰釉？），外底ケズリ調整
47-73	90	11区Ⅲ層下位	磁器色絵	坏台？	口径5.0，底径2.9，器高2.8	有田	17c 後半	外面体部下位～底部・内面露胎，上面絵籠草花文（赤）
47-74	73	2区	磁器染付	猪口	口径（7.8），高台径5.0，器高5.5	肥前	17 c 末～ 18c 後葉	外面酸漿文
47-75	52	18区Ⅱ層	陶器	土瓶蓋	口径5.6，最大径8.6，器高3.1	九州	18c 末～ 19c 中頃	上面鉄釉
47-76	29	6区Ⅰ層	陶器	土瓶蓋	口径8.0，底径4.1，器高1.6	九州	18c 末～ 19c 中頃	落し蓋，鉄釉，底部回転ヘラケズリ調整

図-No	実測No	出土位置	焼成形態	器種	計測値（単位 cm，括弧内復元値）	産地	時期	備考
47-77	25	3区	陶器	土瓶蓋	口径（8.5），最大径11.3，器高3.6	関西系	19c	胎土緻密（磁胎に近い），透明釉（灰緑色味帯びる，貫入目立つ）
47-78	105	16区	磁器染付	鉢・段重蓋	口径7.5，最大径8.6	肥前系	18c 末～19c 中頃	受部釉剥ぎ・アルミナ塗付，外面海浜風景文
47-79	114	廃土	磁器染付	鉢・段重蓋	口径（9.0），最大径（10.0）	肥前	18c 末～19c 初頭	三頭格子状の氷裂文地に雷花文，受部アルミナ塗布
47-80	113	廃土	磁器染付	小鉢蓋	口径（5.4），最大径（6.4），器高1.7	肥前	18c 前半～中頃	鈕は桃実状，外面氷裂文，内面釉は溜し掛け
47-81	68	1区	磁器染付	鉢	口径（9.4），高台径3.9，器高6.5	肥前	17c 第3四半	外面草花文，高台内「太明」銘
47-82	43	11区 Ⅲ層下位	白磁	合子身	口径（5.7），受部径（6.3）， 底径2.5，器高1.7	肥前	17c 中頃	受部釉剥ぎ・細砂付着，外面は釉表面ピンホール目立つ
47-83	94	11区	磁器染付	合子身	口径7.6，受部径8.5，底径3.6，器高2.3	肥前系	19c 初頭～中頃	蛇の目高台，受部釉剥ぎ・アルミナ塗付，外面文様草花・不明（器物）
47-84	39	11区Ⅰ層	陶器	火入	口径（8.3），高台径4.4，器高6.8	内野山	18c 前半～中頃	鋼鉄釉，内底細砂付着
48-85	37	10区Ⅰ層	陶器	擂鉢	高台径17.5	肥前	18c 前半	全面鉄釉，内底・高台部内側面砂粘土目，外面体部タタキ？後横ナデ
48-86	65	工事立会	陶器	擂鉢	高台径（7.7）	瀬戸美濃	19c	鉄釉，高台見込み鉄釉掛け
48-87	38	11区 Ⅲ層下位	陶器	水指？	口径（7.0），底径（10.0），器高13.0	小代	19c 前半～中頃	あるいは花生？（水指としては口径小），外面上位瀝灰釉・下位ヘラケズリ
48-88	80	7区 Ⅰ・Ⅲ層	磁器色絵	仏飯	口径（6.6），脚台径4.4，器高5.8	瀬戸美濃	19c 初頭～中頃	坏部花文（線描はコゲ茶・赤，塗りはベッタリした赤・鮮やかな藍），脚部内面しぼり痕
48-89	110	23区Ⅰ層	磁器青花	小壺 or 仏壺瓶		漳州窯系	16c 末～17c 初頭	外面白化粧・文様不明，内面無釉
48-90	54	23区Ⅱ層	白磁	壺蓋	口径6.5，最大径9.4，器高4.2	肥前	18c 末～19c 中頃	受部アルミナ塗布，外面紋状の小鉄斑目立つ，内面施釉粗い
48-91	93	11区	磁器色絵	水滴	幅6.3 ～ 6.6	有田	17c 後半	型成形（底板内面布目），上面青海波・蝶？・笹文，側面縞文，染付入り素地（青海波の塗り）＋上絵（線描は黒・赤，塗りは赤・緑）
48-92	48	11区 Ⅲ層下位	白磁	飯事道具	高台径（1.2）	肥前	17c 後半以降	ミニチュア碗，貼付け高台，現況外面露胎・内面施釉
48-93	45	11区 Ⅲ層下位	白磁	人形	高さ5.1	肥前	17c 中頃	高麗型人，頭部型押し・体部手捻り成形，頭部は鉄釉・体部は白磁釉
48-94	46	11区 Ⅲ層下位	軟質陶器	人形	高さ3.6	関西系	17c 後半以降	福禄寿？，型成形・中実，透明釉（全体）＋緑釉（斑状）
48-95	47	11区Ⅰ層	土師質	人形	高さ3.3	不明	18c 末～19c 中頃	相撲（着衣・唐子？），型成形・中実，表面キラ粉付着，彩色認められず
48-96	57	廃土	軟質陶器	箱庭道具		関西系	17c 後半以降	塔，屋根は型押し・身は手捏ね，緑釉（施釉補，軒裏露胎）
48-97	64	4区＋5区	青磁	灰皿	口径（8.0），高台径11.3，器高4.6	不明	20c	泥質流し込み成形，外面青磁釉・内面透明釉（掛け分け），外底露胎
48-98	36	10区Ⅲ層	白磁	碍子	底径（3.2）	不明	明治20年頃～ 昭和30年代	ノップ碍子（室内・低電圧配電用），泥質流し込み成形，内壁（穿孔部）施釉
48-99	17	廃土	素焼き	煙瓦	全形寸法 長21.9，幅10.4，厚5.2	関東？	1895年以降	胎土赤褐色・白色粒多量に混入，図上面は型押し格子目文・「HIGO」陰刻銘，4面にコンクリート目地（砂利混入）付着
49-100	123	19区Ⅳ層	縄文土器	深鉢		在地	鳥井原式	口縁部2条の押縄，内外面ともミガキ
49-101	33	7区Ⅰ層	白磁	椀	高台径（6.3）	福建省	12c 後半～ 13c 初頭	内底蛇の目釉剥ぎ，大宰府運類
49-102	63	工事立会	白磁	皿	口径（12.7），高台径（6.1），器高2.4	福建省	11c 後半～ 12c	大宰府Ｃ・Ｄ期，内底釉剥ぎ（円形・広い）
49-103	35	8区Ⅲ層	青磁	皿	底径（3.4）	福建省	12c 後半～ 13c 初頭	同安窯系，内面櫛文（ジグザグ文）
49-104	34	8区Ⅰ層	青磁	皿	底径（4.1）	福建省	12c 後半～ 13c 初頭	同安窯系，内面無文
49-105	58	廃土	青白磁	壺・水注	破片	中国南部	11c 後半～ 12c 前半	外面幅狭の櫛による縦線，内面露胎
49-106	51	16区Ⅱ層	青磁	稜花皿	口径（11.8）	龍泉窯系	15c 前半	釉白濁，外面口縁部直下櫛描き文，内面ヘラ描き文（不明瞭）
49-107	20	SX1-1	陶器	鉢	破片	中国南部	15・16c	胎土は赤褐色・白色粒多く混入，釉は淡灰色～灰オリーブ色（光沢無し）

緊急工事立会出土

図-No	実測No	出土位置	焼成形態	器種	計測値（単位 cm）	産地	時期	備考
49-108	66	漏水工事	土師質	焼塩壺	口径4.8，底径3.9，器高8.0	不明	17c	内面は口縁部～体部粗い横ナデ・体部下位～底部布目，外面無銘，江戸Ⅰ類と同接法
49-109	67	漏水工事	陶器	土管	銅手部口径32.8，筒部下端部径25.6， 全長66.9	肥前？	19c	輪積み成形，胎土暗赤褐色，鉄釉，内面ナデ，外面タタキ後ナデ，内面銅手部・筒部下位～下端面に細砂付着（砂粒多混高の法）

第５表　出土金属製品観察表

図-№	実測№	出土位置	名称	計測値（mm、g）	備考
50-110	7	SP3-1	燃管吸口	長63.1、径9.9 ～ 4.0	銅製、竹製羅宇残存（吸口3本ノ部分は外面ケズリ）
50-11	1	10区Ⅱ層	火縄銃弾 or 榴散弾子	径10.8 ～ 12.3、重さ5.2	鉛製、表面亀裂顕著
50-112	2	17区Ⅰ層	エンフィールド銃弾	長23.1、底径12.2 ～ 13.5、重さ27.0	鉛製、弾底凹部浅い形態、圏溝2条、使用弾？（先端に傷み、弾底縁部潰れる）
50-113	3	20区Ⅱ層	村田銃薬莢	長59.7、底径16.1、外口径（12）	銅製・十三～十八年式、雷管キャップに打撃痕認める
50-114	4	廃土	村田銃薬莢	長59.6、底径15.2 ～ 15.7、外口径10.3 ～ 12.8	銅製・十三～十八年式、雷管に打撃痕認められず
50-115	5	7区Ⅱ層下位	ベルト留金具	環縦34・横41、ピン長36	銅製、ピンバックル式、環は長方形
50-116	6	廃土	ベルト留金具	環縦35・横45、ピン長37	銅製、ピンバックル式、環は長方形、溶融したガラス付着
50-117	8	18区	蹄鉄	幅～ 127、長～ 137	鉄製、後蹄（平面楕形）・右蹄、爪先側が反り上る、溝・釘穴錆化（部分的に確認）

第６表　出土石製品観察表

図-№	実測№	出土位置	種類	石材	計測値（cm）	備考
51-118	15	10区SB03	雨落ち石	凝灰岩	高12.1	五輪塔火輪の転用品。上面のホゾ穴が明らかに拡がっており、磨耗する。ホゾ穴基底付近に雨垂れ状の窪みあり。火輪は下面が反り、下面中央に粗い緩やかな窪みを有する形態。
51-119	125	7区雌集中Ｂ	構造物部材	凝灰岩	幅～ 26.0、厚～ 8.6	長板状に整形した近代の構造物（配水溝等）の部材。コンクリート付着。図正面は雛爪状工具による被杵形の工具痕。側面は縦～斜方向の削痕。裏面は平滑、部分的に横方向の削痕。
51-120	13	10区Ⅰ層	砥石	流紋岩	幅～ 4.4、厚～ 1.4	使用面6面。縁辺を面取り状に狭い幅で使用した面あり。
51-121	14	廃土	黒碁石	粘板岩	径1.21、厚0.36	研磨調整。周縁を緩やかに面取り。
51-122	12	5区Ⅱ層下位	鋳型	砂岩	長29、厚1.0	表面（鋳型面）は断面Ｖ字形の型と湯道。裏面は斜めに切った平滑面。表裏面とも平滑（研磨）。側面は擦痕明瞭（調整痕）。
51-123	126	23区Ⅱ層	構造物部材	凝灰岩	幅～ 39.0、厚～ 15.8	長板状に整形した近代の構造物（配水溝等）の部材。漆喰付着。図正面は調整粗く凸凹。正面縁辺・側面は打裂により整形。裏面は平滑、手垢？による削痕あり。

第７表　出土ガラス製品観察表

図-№	実測№	出土位置	種類	計測値（cm）	色調	備考
52-124	10	23区SB05	洋酒瓶	口径2.2	オリーブ色	コルク栓、微気泡あり、なで肩
52-125	9	廃土	ワイン瓶	底径7.1	オリーブ黒色	透明度低い、外器面は細かい凸凹（内器面は平滑）、パント（底部の窪み）深い
52-126	11	廃土	釦	径1.18 ～ 1.20、厚0.27	白色	4つ穴、鎮台兵着用の播粹釦（本丸御殿跡にて大量出土）と同形態

第８表　出土瓦観察表

図-№	実測№	出土位置	種類	計測値（cm）	備考
53-127	18	2区SB01	巴文軒丸瓦	軒丸部瓦当径8.6・文様区径5.1 軒平部瓦当縦幅5.4	近代瓦、軒丸部巴文は太く断面半円形、軒平部唐草文端部は珠状に膨らむ、瓦当面無文部・上面・側縁・裏面ナデ、瓦当面・上面キラコ付着（軒丸部周縁顕著）
53-128	124	18区Ⅱ層	無文軒丸瓦	瓦当外径16.8、文様区径8.0	近代瓦、瓦当周縁・側縁・裏面ナデ、瓦当面・裏面キラコ付着顕著

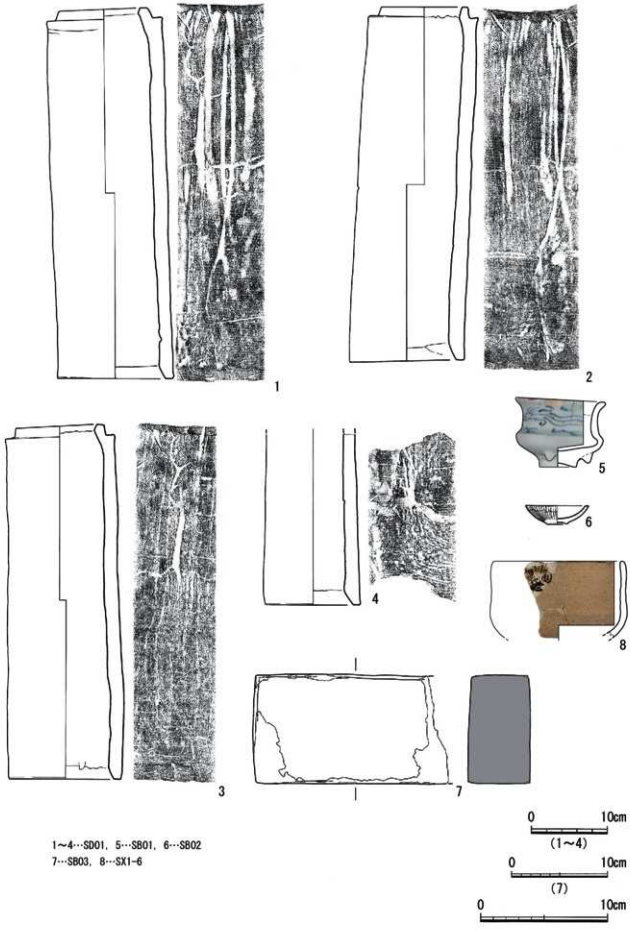
第９表　出土瓦刻印観察表

博物館本館増改築工事に伴う調査出土

図-№	拓本№	出土位置	時期	種類	刻印面	記銘
54-129	1	7区Ⅰ or Ⅱ層	現代？	平瓦・桟瓦平部	凸面	横書き（左から）「宇土駅遠／ﾊｯ製／御用」、滑り止め条痕も型押し
54-130	2	9区Ⅰ層	近代	平瓦・桟瓦平部	凸面	「筑（鹿）内「大」）後／柳川／竹松／飲田」
54-131	3	20区Ⅰ層	近代	平瓦・桟瓦平部	凸面	「筑（鹿）内「平」）後／柳川／金屋／飲田」

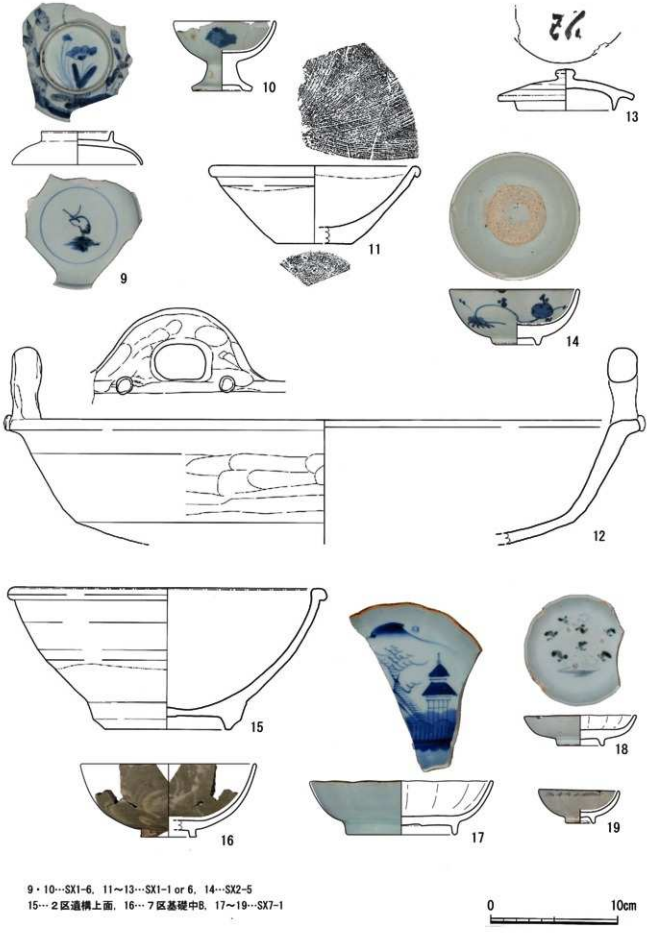
緊急工事立会出土

図-№	拓本№	出土位置	時期	種類	刻印面	記銘
54-132	4	海水工事立会	近代	平瓦・桟瓦平部	凸面	「甲斐田謹製」



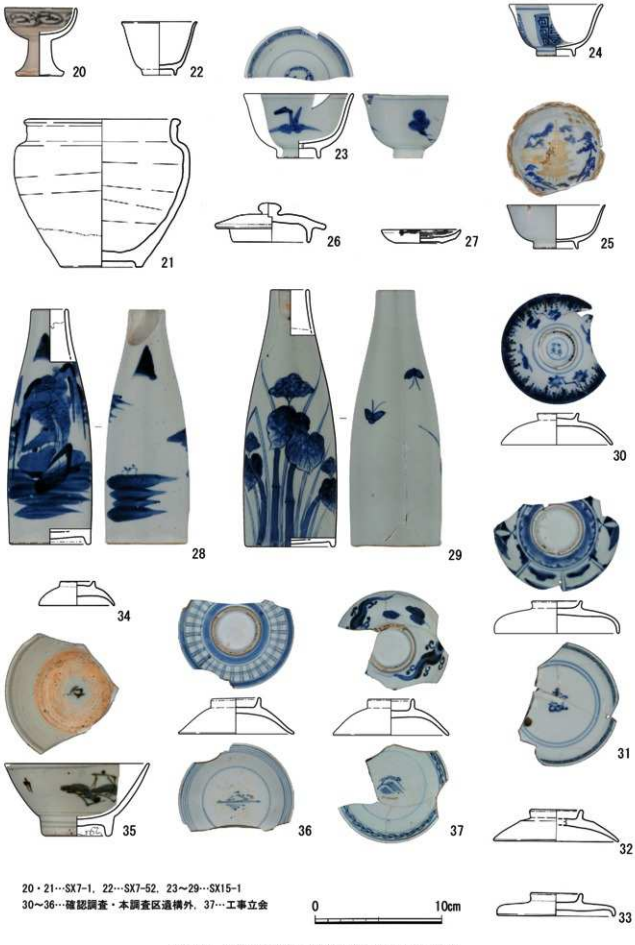
1～4…SD01，5…SB01，6…SB02
7…SB03，8…SX1-6

第43図　出土陶磁器・土器類実測図1（1／3・1／4・1／5）



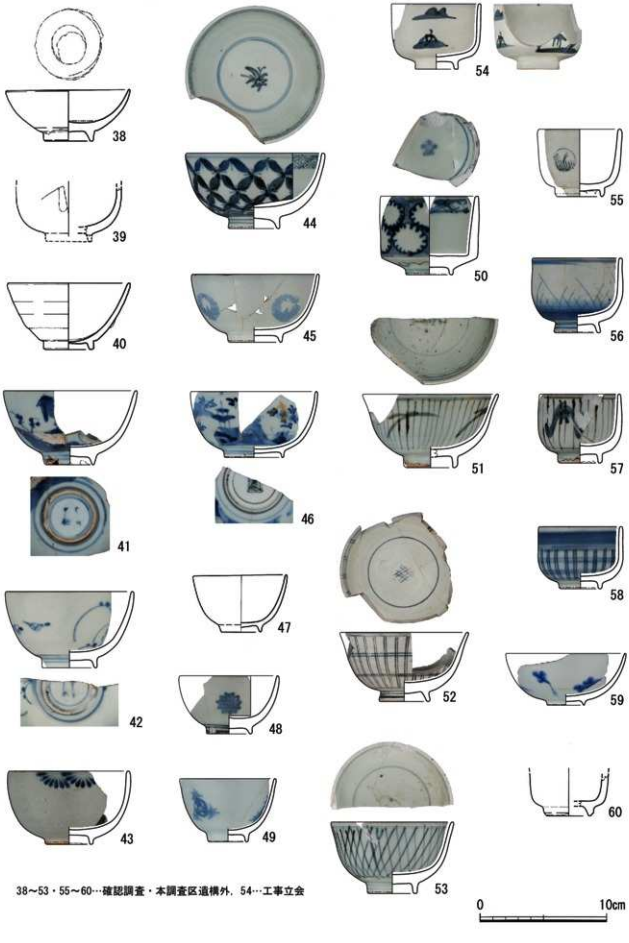
9・10…SX1-6，11～13…SX1-1 or 6，14…SX2-5
15…２区遺構上面，16…７区基礎中B，17～19…SX7-1

第44図　出土陶磁器・土器類実測図２（１／３）

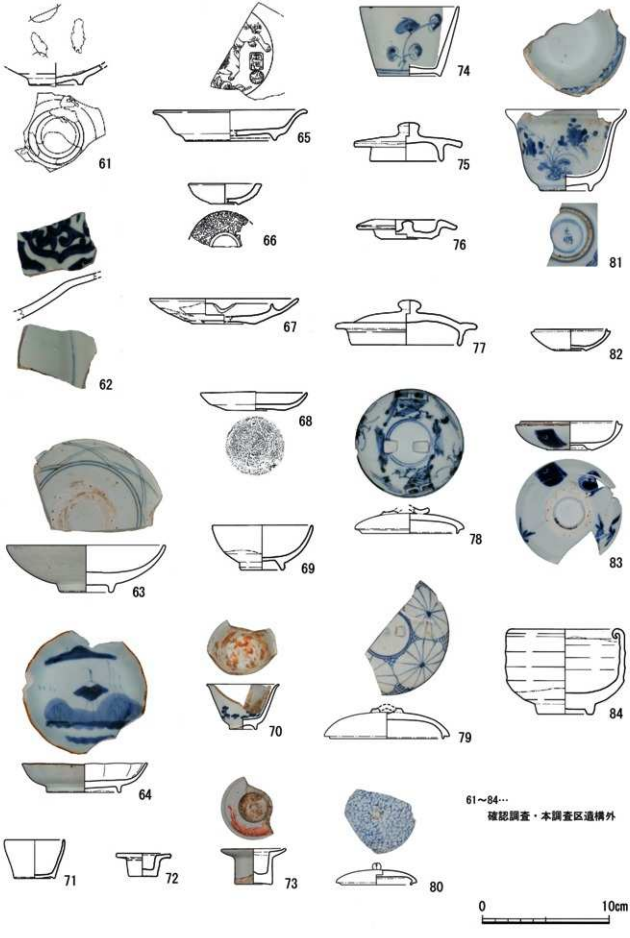


20・21…SX7-1，22…SX7-52，23～29…SX15-1
30～36…確認調査・本調査区遺構外，37…工事立会

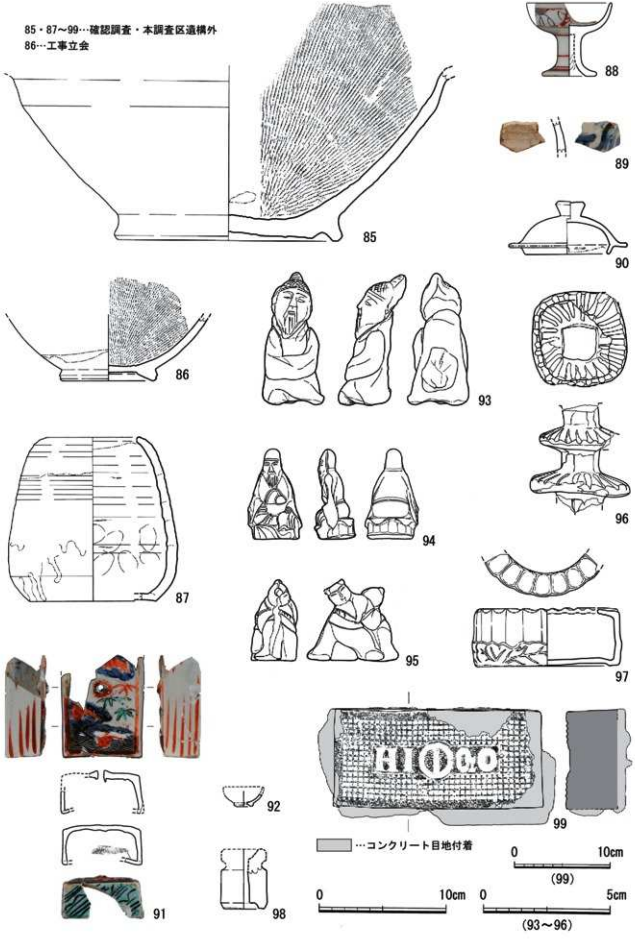
第45図　出土陶磁器・土器類実測図３（１／３）



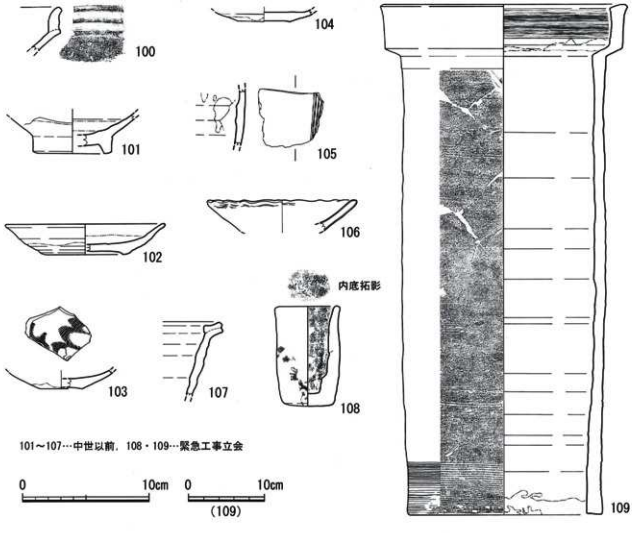
第46図　出土陶磁器・土器類実測図４（１／３）



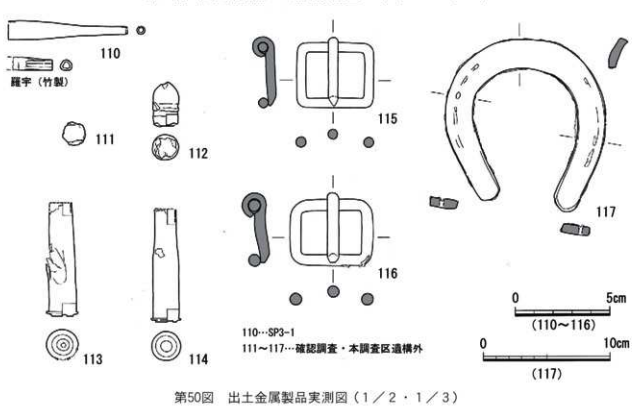
第47図　出土陶磁器・土器類実測図５（１／３）



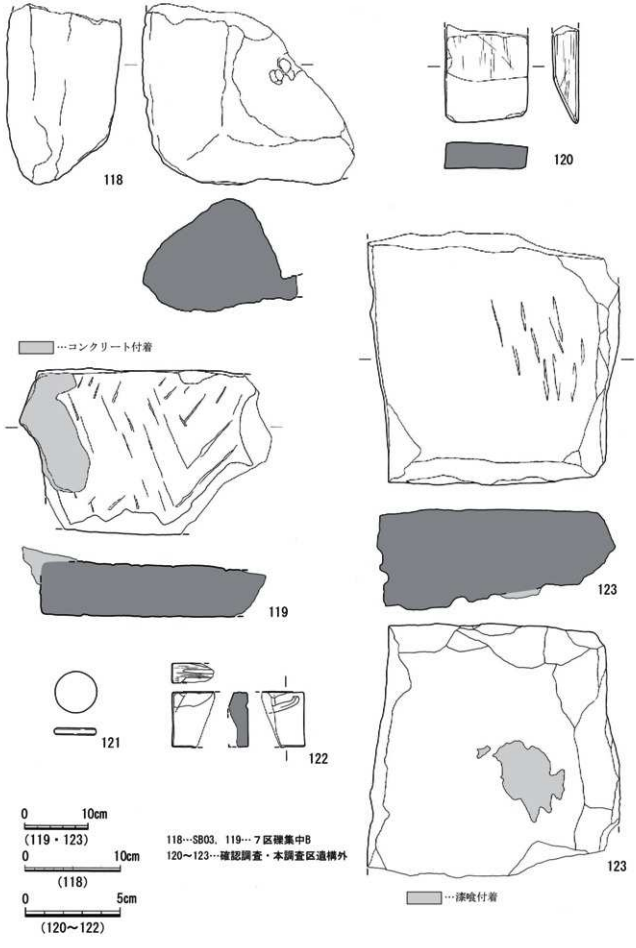
第48図　出土陶磁器・土器類実測図６（２／３・１／３・１／４）



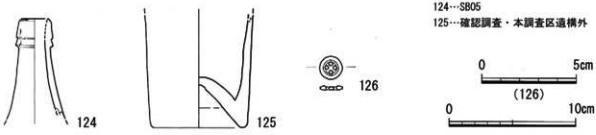
第49図　出土陶磁器・土器類実測図７（１／３・１／５）



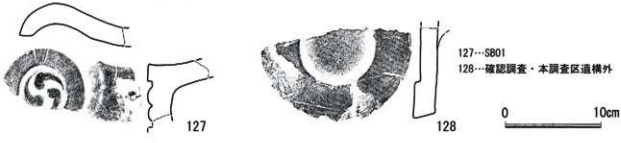
第50図　出土金属製品実測図（１／２・１／３）



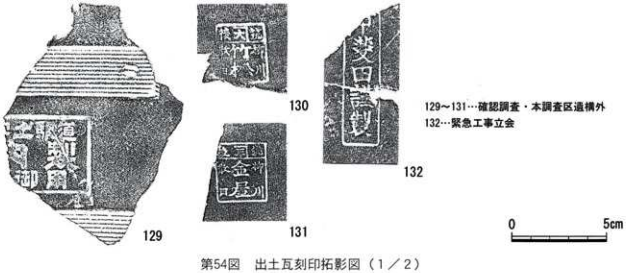
第51図　出土石製品実測図（１／２・１／４・１／６）



第52図　出土ガラス製品実測図（1／2・1／3）



第53図　出土瓦実測図（1／4）



第54図　出土瓦刻印拓影図（1／2）

第５章　総括

１．土地利用の変遷（第55 ～ 57図，第10表）

確認調査・本調査において検出した遺構は、検出層位等によって以下３期に大別される。

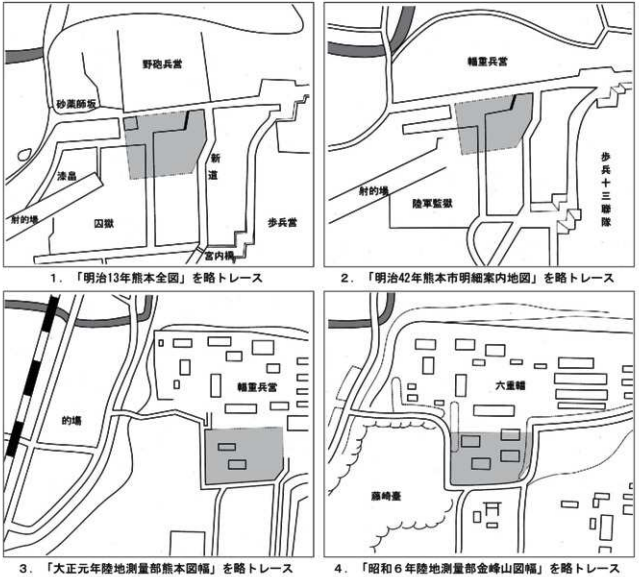
１期：Ⅲ層が被覆し、下部の自然堆積土層（Ⅳ～Ⅶ層）を掘り込む遺構である。SX1-1 ～ 4・6、SX2-10・11、SX3-6・7・10 ～ 12、SX18-1・2、SP14-1 ～ 3等土坑状・柱穴状の遺構が挙げられる。

２期：Ⅲ層を掘り込む遺構である。SB01、SD01、SX1-5、SX3-5、SX4-1・2、SX7-1 ～ 5、SX16-2・3等が挙げられる。うち、SX3-5、SX7-2 ～ 5、SX16-2・3はⅢ層中下位を掘り込み、上部にⅢ層上位が被覆する、すなわちⅢ層埋没過程で形成されたことが明らかなものである。

３期：Ⅱ層を掘り込む、あるいはⅡ層堆積以降に構築されたことが明らかな遺構である。SB02 ～ 05、SX1-7、SX16-1が挙げられる。SB については、後述する理由から時期細分が可能である。

まずは、過去の絵図・地図・図面との照合から土層・遺構の時期比定を行ない、①～⑤に根拠を記す。

① SB01は、位置と方位から明治13・42年（1880・1909）の地図にみられる斜方向の区画（第55図１・２の太線）に沿った建物基礎である可能性が高い。この斜方向の区画は、江戸時代の絵図にはみられ



１．「明治13年熊本全図」を略トレース　２．「明治42年熊本市明細案内地図」を略トレース

３．「大正元年陸地測量部熊本図幅」を略トレース　４．「昭和６年陸地測量部金峰山図幅」を略トレース

淡いアミかけ…調査地

第55図　調査区周辺土地利用変遷図

ず、大正元年（1912）以降の地図には輜重隊兵営（藩政期までは二ノ丸御屋形）南側通路の埋没とともに消失している（第55図３・４）。このことから、SB01の存続時期は明治時代と想定される。

② Ⅱ層はSB01上部に被覆しており、SB01廃絶時の造成土と判断される。また、確認調査・本調査区のほぼ全域に堆積が認められることから、広範な造成事業に伴うものと考えられる。地図をみると、明治42年（1909）～大正元年（1912）の間の明治末年頃に輜重隊兵営南側通路の埋没を伴う土地区画の大規模な改変があったと考えられ、Ⅱ層はその際の造成土の可能性が高い。

③ Ⅲ層は、層中に硬化を伴う薄い整地土が認められたり、埋没過程で遺構が掘り込まれたりすることから時期幅があると考えられる。下限はⅡ層堆積以前、すなわちSB01廃絶以前であり、これは以下２点からも証左される。SB01が位置する２区の土層堆積状況（東壁と南壁の土層断面の比較）から、SB01以前にⅢ層は堆積していたと考えられる。ほぼ直角をなす方位からSB01と同じ土地区画規制のもとに構築された可能性が高いSD01は、Ⅲ層上位を掘り込んでいる。これらSB01・SD01の上限は後述するⅢ層出土品の型式等を考慮すれば、明治時代中頃（19世紀末）以降と想定される。

④ Ⅱ層を掘り込むSB02・SB04は、第57図の建物配置と位置照合ができることから、昭和50年度の博物館本館建物建設工事前まで存在していた建物の基礎と考えられる。SB02は国立病院看護学校校舎の北辺に、SB04は看護学校寄宿舎の北辺に相当する。これらの建物は旧陸軍時代の輜重隊倉庫を転用したものである[1)]。大正元年（1912）地図には無いが、昭和６年（1931）地図には遺構図との照合は難しいものの、付近に建物が描かれている（第55図４）。このことから、SB02・SB04は、大正年間～昭和初年頃以降に建設された可能性を指摘できる。

⑤ SB02・04と平行するSB03・05は、SB02・04と同じ土地区画規制に基づく可能性が高く、SB05についてはⅡ層を掘り込んでいる。ともに明治末年頃以降に建てられた輜重隊建物と考えられる。それぞれSB02・04に近接することから同時に存在したとはみられず、さらには博物館本館建物建設工事直前の建物配置（第57図）に該当するものが無いことからSB02・04に先行するものと考えられる。このことは、SB05の上部に薄くⅡ層上位土が被覆し、Ⅱ層上面を掘り込むSB04よりもやや低いレベルにて検出されている点からも証左される。なお、SB03は、上部にⅠ3層が掘り込むように堆積する箇所（11区）が認められ、博物館本館工事の際に再破壊されていることが土層断面から観察されている。

次に、出土品をもとに上記の内容を補足することとする。本調査区における近代以降の資料は少量であり、近代の遺構・造成土の時期や様相を示すものは乏しい。そこで、第10表に未報告資料を含めた明らかな近代所産の出土品を挙げ、以下①～⑥に所見を記す。

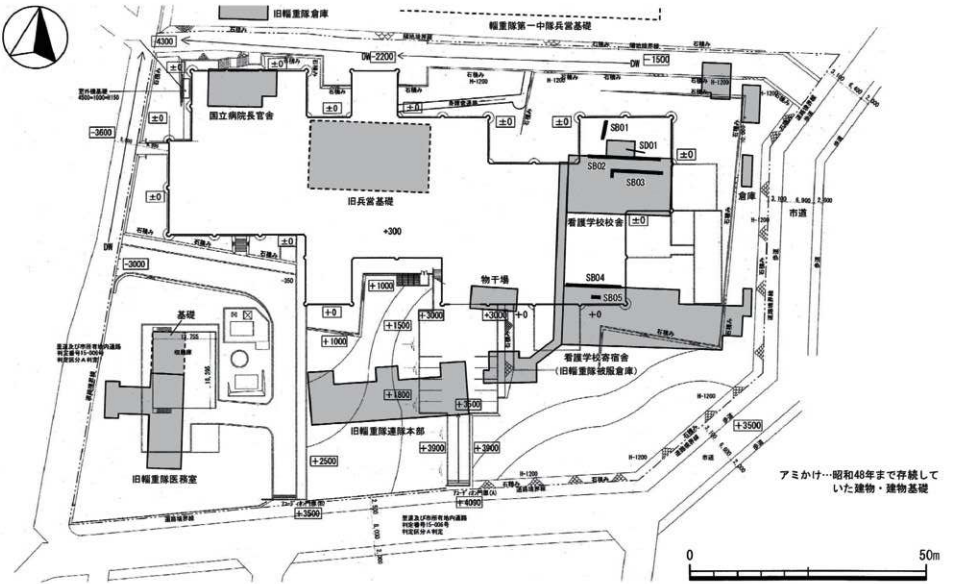
① Ⅱ層は、主に明治末年頃の造成土と想定される。出土品では、19世紀末以降に普及する銅版摺り磁器染付皿の小片（第56図）、明治十三～十八年式（明治22年に制式銃として採用）の村田銃薬莢（第50図113）などが上限を示すものである。

② Ⅲ層には時期幅があり、明治時代の造成土と想定される。出土品では、ノップ碍子（第48図98）・泥漿流し込み成形白磁湯呑碗（第46図60）が上限を示す。前者は明治20年（1887）頃以降の産品、後者は定型化した軍用食器であり、概ね19世紀末～20世紀前半の産品である。

③ Ⅲ層堆積以降、Ⅱ層堆積前の構築と想定されるSB01からは、近代の瓦片（第53図127ほか）が出土している。

④ Ⅱ層堆積以降の大正時代～昭和初年頃以降に建設されたと想定されるSB02・04からは近代の瓦片・煉瓦片・コンクリート片・洋釘・銅版摺り磁器染付碗などが出土している。SB05からはガラス製洋酒瓶（第52図124）が出土している。

第56図　Ⅱ層出土銅版摺り染付皿



第57図　主要遺構照合図（1／800）

第10表　近代遺物出土一覧表

層位・遺構	調査区	検出状況	内容
Ⅱ層	17区		化学コバルト手描き磁器染付輪花皿・徳利，洋釘
	18区		型紙摺り磁器染付碗，化学コバルト手描き磁器染付皿，化学コバルト手描き銘款の小坏，磁器染付徳利，桟瓦，軒丸瓦（第53図128），薬剤を攪拌するガラス棒
	19区		銅版摺り磁器染付皿（第56図）
	20区		瓦，村田銃薬莢（第50図113）
	21区		化学コバルト手描き磁器染付碗
	23区		板状の凝灰岩部材（第51図123）
	24区		桟瓦
Ⅲ層	6区		泥漿流し込み成形白磁湯呑碗（第46図60）
	10区		瓦，白磁ノップ碍子（第48図98）
Ⅲ層上位	7区		桟瓦
Ⅲ層下位	7区		ピンバックル式ベルト金具（第50図115）
SD01	7区	Ⅲ層を掘り込む	瓦質土管（第43図1～4）
SB01	2区	上部にⅡ層被覆	桟瓦，軒桟瓦（第53図127）
SB02	6区	Ⅲ層を掘り込む	桟瓦，透明で気泡の無いガラス片
SB03	10区	Ⅲ層を掘り込む	桟瓦，煉瓦（第43図7），コンクリート片
	11区	Ⅲ層を掘り込む	コンクリート片
SB04	22区	Ⅱ層を掘り込む	銅版摺り磁器染付碗，煉瓦
	23区	Ⅱ層を掘り込む	型紙摺り磁器染付碗・皿，洋釘
	24区	Ⅱ層を掘り込む	板状のコンクリート片
SB05	23区	Ⅱ層を掘り込む	ガラス製洋酒瓶（第52図124）
SX15-1	15区	Ⅳ層を掘り込む？	桟瓦
SX16-1	16区	Ⅱ層を掘り込む	煉瓦
礫集中部A	7区	Ⅲ層上位にて検出	コンクリート片
礫集中部B	7区	Ⅲ層上位にて検出	コンクリートが付着する板状の凝灰岩部材（第51図119）
土坑状遺構上面	2区	Ⅶ層上位にて検出作業	型紙摺り磁器染付碗

⑤　Ⅲ層上位を掘り込むSD01は、瓦質の土管を埋設する配水溝である。この土管は江戸時代の丸瓦の製作技法を用いた形態であり、瓦工による製作と判断される。3-b項にて後述する理由等から概ね19世紀代末に位置付けられる（第43図1～4）。

⑥　Ⅰ3層は、博物館本館建物基礎部分が深く掘り込まれるなどの堆積状況に加え、ビニール・プラスチック片など現代の遺物が混入することなどから、昭和50年度の博物館本館建物建設に伴う造成土と判断される。本層からは大形のコンクリート塊が多く出土しており、これらは、主にSB02・04の構築材と考えられる。

出土品からみた時期は、地図・図面と主要の照合をもとにした時期比定に矛盾しておらず、これを補足する内容といえる。以上をもとに、各土層・主要遺構の時期、土地利用の変遷を列記することとする。

1期：Ⅲ層は明治時代と想定される造成土である。1期遺構はⅢ層が被覆するもので、土坑状・柱穴状の遺構を検出している。出土品は、江戸時代後期の陶磁器類が主体である。

2期：Ⅲ層堆積以降、Ⅱ層堆積前の遺構であり、明治時代中頃～末年頃に位置付けられる。SB01は、明治13・42年（1880・1909）地図にみられる斜方向の土地区画に沿って構築されたとみられる建物布基礎である。19世紀代末頃に位置付けられる瓦質土管を埋設する排水溝SD01は、SB01とほぼ直角の方位を示すことから、同じ土地区画規制に基づいて構築された可能性が高く、本期に位置付けられる。

3期：明治42年（1909）地図と大正元年（1912）地図を比べると、明治末年頃に幅重隊兵営（藩政期までは二の丸御屋形）南側通路を埋めて、敷地を南側（現博物館敷地）に拡幅する大規模な土地区画の改変があったことが判る。Ⅱ層は、主にその際の造成土である可能性が高く、SB01の廃絶もこれに伴う。本期に位置付けられるSB02～05は、旧陸軍時代の幅重隊建物の基礎である。SB02・04は大正年間～

昭和初年頃以降に構築し、戦後には国立病院看護学校建物に転用されて昭和50年度の博物館本館建物建設直前まで存続していた。SB03・05は、これに先行し、大正年間以降に構築されたものと想定される。なお、Ⅰ3層中から出土するコンクリート塊の多くは、恐らくはSB02・04の廃材と考えられる。

2．土層堆積状況からみた土地改変（第58・59図）

確認調査・本調査区における近代の造成土（Ⅱ・Ⅲ層）について記す。明治時代の造成土と想定されるⅢ層は北側において厚く堆積しているが、南側においては薄く、認められない箇所も多い。一方、明治末年頃の造成土と想定されるⅡ層は、北東側の1・2区においてはSB01廃絶に伴って厚く堆積するものの、概して北側では薄く、南側では厚く認められる。これは、明治末年頃の造成（Ⅱ層堆積）が、調査区南側において重点的に行なわれたことを示しており、前述のように幅重隊兵営（藩政期までは二の丸御屋形）南側通路を埋めて、幅重隊兵営の敷地を調査区（現博物館敷地）まで拡幅するものであったことを反映すると考えられる。

南北方向の土層柱状図をみると、自然堆積土であるⅦ層（ローム土層）の高さが14区において大きく落ち込んでおり、北側には急激に、南側には比較的緩やかに上がっていることが看取される。旧地形において東西方向の支谷が入り込んでいたことを示すものであり、この支谷は、谷口側では現存する熊本城西側の登城路である谷道（砂薬師坂）に続くと考えられる。調査区（現博物館本館敷地）はその谷奥側に位置するが、江戸時代の絵図にこの地形やこれを反映した土地区画が認められないことから、築城時には、現況のように平坦に均されていたと考えられる。熊本城築城に伴う地形の改変・造成の痕跡は城域各所に認められるが、本事例はその新たな知見として提示することができよう。

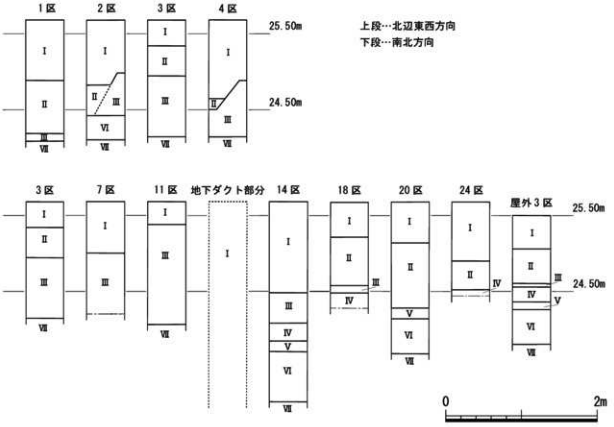
3．出土品の様相

a．江戸時代の出土品

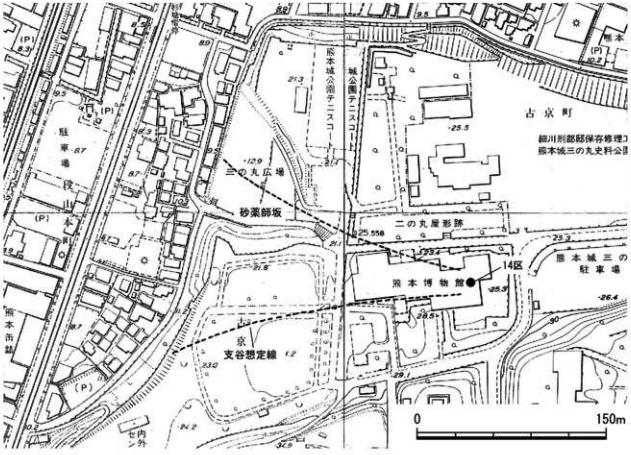
出土品は江戸時代の瓦・陶磁器類が殆どを占める。調査区は、第2章にて述べたように江戸時代を通して主に中級家臣の屋敷地として利用されており、出土品は、その様相を示すと考えられる。陶磁器類について、本丸御殿・飯田丸における既往調査との比較から今回の調査区の特徴を2点指摘しておく。

1点目は器種組成である。注目されるのは、紅皿（第43図6・第47図66）・紅猪口（第44図19）・内面に紅が付着した小坏（第47図70）や飯事玩具（第48図92）が認められることであり、これらは屋敷地において家臣本人だけではなく、その家族（女性・子供）も居住していた可能性を示す資料といえる。また、陶磁器製・土製の人形（第48図93～95）・箱庭道具（第48図96）、餌入れの可能性がある小形擂鉢（第44図11）、茶器として使用された鉄絵碗（第43図8）など、生活に潤いを与える用具も認められ、これらは、本調査区にあった城内の屋敷が官舎としてではなく、実生活が営まれた場であった可能性を示している。このことと対比されるのが本丸御殿跡における陶磁器類の組成である。19世紀後半に藩庁～熊本鎮台本営として利用されていた本丸御殿においては、上記のような生活を潤す用具が無い、あるいは極端に少ないという特徴が挙げられ、加えて、調理具（擂鉢・捏鉢など）・仏具（仏飯）が寡少であること、文房具（水滴）・喫煙具（灰落し・火入）の比率が多いことなどから、実生活の場ではなく、男性による執務空間であったことが想定されている[2]。

2点目は時期組成である。定量分析は行なっていないものの、概要の把握はできる。18世紀末～19世紀中頃を主体とするが、17世紀代の産品もみられ、18世紀代になると明らかに量化が認められる。こうした継続的なあり方は、江戸時代を通し、家臣の屋敷地として生活が営まれていたことを示すものといえる。これに対し、飯田丸調査区では、17世紀代初頭、すなわち築城期頃の資料は一定量がみられるものの、17世紀中頃～18世紀代の資料は殆ど認められない。このことは、飯田丸が江戸時代を通して倉庫として利用されていた、すなわち原則として生活空間ではなかったことを示している[3]。土地利用のあり方が、出土品の時期組成を反映するものといえる。



第58図　確認調査・本調査区土層柱状図（1／50）



第59図　調査区周辺旧地形想定図（1／3,000）

b．近代の出土品

本項では、土管・煉瓦について試論を示す。ともに、熊本城が旧陸軍施設として利用されていた近代の資料であり、その背景にある歴史事象を考えてみたい。

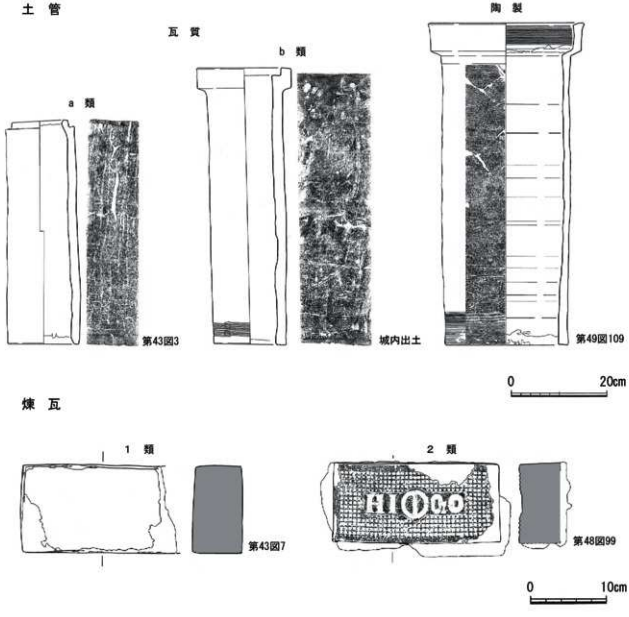
（1）土管（第60図）

熊本城内から出土する瓦質土管には以下の２形態がみられる。

a類：今回調査SD01において埋設されていた瓦質土管（第43図１～３）である。今日、通常に認められるものと異なり、継ぎ手部が玉縁状を呈している。筒部内側面には布目・鉄線切り痕跡が、筒部下端には斜方向のヘラケズリが認められる。

b類：城内の他地点において出土した瓦質土管には、継ぎ手がコ字形に拡幅する形態がある。筒部外面下位には、恐らくは連接の際に塗布する漆喰等の付着効果を高めるためのものであろう、櫛状工具による条線が施されており、筒部内側面には布目・鉄線切り痕跡が認められる。

a類は、熊本市二本木遺跡群第31次調査区の19世紀後半頃に埋没した池跡に伴う排水溝資料に同形態がみられ[4]、加えて、SD01が掘り込まれる造成土（Ⅲ層）の堆積時期の上限が19世紀末とみられることか



第60図　土管・煉瓦分類図（1／5・1／8）

ら、概ね19世紀後半に位置付けられる型式である。形状・製作技法は、丸瓦に共通するものであり、瓦工が、その技術系譜において製作したものと考えられる。一方、ｂ類は焼成形態（瓦質焼成）・筒部の成形技法がａ類に共通することから、瓦工による製作と考えられるが、継ぎ手の形状はコ字形であり、整形技法（筒部外面下位の条線）にも差異が認められる。コ字形の継ぎ手は、玉縁状のものに比べて、内径が一定していることから配水時の水流が安定する、継ぎ手の面積が大きいことから連接部分からの水漏れ防止効果が高いなど、より効率的な形態といえる。このことを勘案すれば、ｂ類は、他の素材製品（陶器の可能性が高い）における土管の形状・技法を導入したものと考えることが可能である。すなわち、ａ類からｂ類への型式変化が想定されるのである。その変化は、恐らくは近代以降、新規の需要に応じて瓦工が土管を製作するにあたり、当初は、従来の技術系譜において製作していたものが（ａ類）、他の素材形態からの情報を導入することによって、より効率的な形態（ｂ類）を製作するに至ったものと捉えることができよう。

この他、土管には漏水に伴う緊急工事立会において出土した陶製の大形品がみられる。胎土は暗赤褐色を呈し、鉄釉を粗く施す、輪積み成形で筒部外側面に叩き目の痕跡が残るなどの特徴が認められるものである。これらは肥前甕の特徴に共通するものであり、恐らくは肥前において生産されたものと考えられる。さらには、内面継手部と筒部下位～下端面に泥漿状の細砂が付着しており、これは、肥前Ⅴ期の陶器にみられる砂敷き窯詰め法を示すものである。このことから本資料は、概ね19世紀代に位置付けられる。

以上、本調査区において出土した焼成形態の異なる土管の二者は、ともに、それぞれの工人が従来の技術系譜において製作した、ほぼ同時期の製品と考えられる。すなわち、瓦質・陶製の違いは時期差ではなく、それぞれの工人の技術系譜によるものと捉えられる。なお、陶製の土管は、製作工程のタタキ整形時に筒部内側に腕を入れる必要性から、畢竟、瓦質のような細い径のものを製作することはできない。陶製の土管が大形品であるのはそのためであろう。陶製は幹線、瓦質は支線といった配管線の違いによって使い分けをしていたことも考慮される。

（２）煉瓦（第60図）

本報告では２点の煉瓦を報告している。ともに全形寸法であるが、明らかな差異が認められる。

１類：胎土は明赤褐色で、表面の色調はやや白濁する。現況で刻印は認められず、無文である。

２類：胎土・表面の色調がにぶい赤褐色で、胎土中には白色粒が多量に認められる。焼成は１類に比べて明らかに硬質である。型押しの格子目文と「HIGO」の陰刻の商標が認められる。

上記の差異は、生産地の違いを反映したものと考えている。城内における煉瓦の出土は、桜馬場地区において多量に認められ、これは大正期～昭和初年に建設された長大な旧陸軍兵器敞建物の部材とみられる[5]。この資料との比較から本報告資料について検討することとしたい。

桜馬場地区資料をみると、１類と胎土・表面の色調が共通し、無文のもの・円形の小刻印が押捺されるものが圧倒的に多い。一方、２類と同じ商標銘の資料は認められないが、これと胎土・表面の色調・焼成が共通するもので「SHINAGAWA」の陰刻の商標銘があるものが少量ながら認められる。所謂、品川煉瓦である。この出土状況は、旧陸軍兵器敞建設にあたっては、１類と同種の、恐らくは近郊産の大量入手が容易であった煉瓦に加えて、遠方から入手した品川煉瓦も調達していたことを示している。建物部材の調達において、不足分は輸送費が高い遠方からのものをもってでも補っていた可能性が高いといえる。これは、工事期間が急がれていたこと、建設に際しては、当然のことながら陸軍中央機関の強い関与があったことを反映するものであろう。

翻って、本調査区資料をみると、１類は、桜馬場地区資料において圧倒的に多い煉瓦と同種であり、恐らくは近郊で生産されたものと考えられる。２類は、商標から現在の株式会社肥後屋製とみられる。肥後屋は、明治28年（1895）、千代田区神田錦町において開業し、社名は創業者の加藤民五郎が熊本県の出身であったことに因んでいるという[6]。２類の胎土・表面の色調・焼成が桜馬場地区出土の品川煉瓦と共通

するのは、同じ工房ではないにせよ、陶土の産出地・製作技法についての共通性を示すとみられ、これは同じ東京に所在する会社の製品であったためと考えられる。２類が「HIGO」銘を有するものの、地元産ではなく、東京の肥後屋製である可能性が高いと考えたのは以上の理由による。前述のように、陸軍施設建設にあたっては、不足分を補うために東京の煉瓦会社の製品が調達されたとみられ、２類の出土は、そうした脈絡で捉えることができるのである。

４．まとめ

今回の調査成果は、以下のように要約される。

① 今回の調査は熊本博物館本館増改築工事に伴うものである。調査区が特別史跡内に位置することを踏まえ、少なくとも明治10年（1877）の西南戦争以前の土層・遺構を保護するという観点から、ボーリング調査・確認調査の結果をもとに工事に伴う掘削深度を計画し、後の本調査・工事立会において、それらについて現状保存が図られたことを確認した。

② 昭和50年度の博物館本館建物建設により多くの遺構が破壊されたものの、地下室工事などに伴う深い掘削を受けていない箇所については、土坑・柱穴等、明治初年頃から江戸時代に遡る可能性が高い遺構が残存していることを確認した。

③ 記録保存の対象となった近代の土層は旧陸軍時代の造成土であり、主要遺構は輜重隊建物の基礎・配水施設である。

④ 明治末年頃に輜重隊兵営の敷地を南側（現熊本博物館本館敷地）に拡幅する大規模な土地区画の改変があり、Ⅱ層がその際の造成土である可能性が高い。このⅡ層を鍵層として主要遺構は二時期に大別され、新規の遺構 SB02・04は、大正年間～昭和初年頃以降に構築し、戦後には国立病院看護学校建物に転用されて昭和50年頃まで存続していた建物基礎と考えられる。

⑤ 土層堆積状況より、調査区内に東西方向の支谷が入り込んでいることが確認された。この支谷は、熊本城西側の登城路である谷道（砂薬師坂）に続き、調査区はその谷頭側に位置すると考えられる。熊本城築城前の旧地形を示すものである。

⑥ 調査区は江戸時代において、主に中級家臣の屋敷地であった。出土陶磁器の器種組成から、屋敷が官舎としてではなく、家族もともに居住していた実生活の場であった可能性が指摘される。また、時期組成は、江戸時代を通して屋敷地として生活が営まれていたことを示している。

⑦ 出土した土管・煉瓦について、考古学的な観察から、近代における型式変化や地域差を見出し、これら製品の需要のあり方を想定した。

註

1）当時、熊本博物館学芸員であった富田紘一氏によれば、建物は平屋造り（外観はモルタル？）であったという。写真等は見つからなかった。

2）熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書２－本丸御殿の調査－』2016

3）熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書１－飯田丸の調査－』2014

4）熊本市教育委員会『二本木遺跡群ⅩⅣ－二本木遺跡群第31次調査区（B・C・D・E・F・G・I・J・L・M区）発掘調査報告書』2011

5）熊本市教育委員会『熊本城跡　桜馬場地区－熊本城跡遺跡群桜馬場地区埋蔵文化財確認調査報告書-』2011

上記報告書に加え、平成27年度に実施した隣接地の確認調査（未報告）の成果による。

6）ホームページの記載内容を株式会社肥後屋に問合せ、確認した。なお、本報告資料２類と照合する資料の有無についても問い合わせたが、東京空襲により焼失したため、近代の製品の内容については不明であるという。

1 区東壁土層断面

1 区北壁土層断面

屋外ボーリング調査風景

屋内ボーリング調査風景

確認調査・本調査区北側（1 ～ 12区）

確認調査・本調査区南側（13 ～ 24区）

1 区掘り止め基底面（南から）

1 区南壁土層断面

2 区掘り止め基底面（南から）

2 区 SB01検出状況（南から）

2区西壁土層断面

2区南壁土層断面

3区掘り止め基底面（南から）

3区東壁土層断面

3区南壁土層断面

4区掘り止め基底面（南から）

4区西壁土層断面

5区遺構検出状況（西から）

5 区 SB02検出状況（西から）

5 区 SB02掘形（西から）

5 区東壁土層断面

6 区遺構検出状況（西から）

6 区掘り止め基底面（西から）

6 区 SB01検出状況（東から）

6 区 SB01掘形（東から）

6 区西壁土層断面

7 区 SD01･SB02等遺構検出状況（東から）

7 区掘り止め基底面（東から）

7 区 SD01土管露出状況（東から）

7 区 SD01掘形（東から）

7 区 SB02検出状況（東から）

7 区礫集中部 A 上位（写真上が西）

7 区礫集中部 A 下位（写真上が西）

7 区礫集中 B（南東から）

8区Ⅲ層残存状況（西から）

8区掘り止め基底面（西から）

8区西壁土層断面

9区東壁土層断面

10区遺構検出状況（東から）

10区掘り止め基底面（東から）

10区 SB03検出状況（南から）

10区 SB03掘形（南から）

10区西壁土層断面

11区掘り止め基底面（西から）

11区 SB03検出状況（西から）

11区南北方向土層断面 a － a'

11区エレベーター設置箇所遺構検出状況（南から）

11区エレベーター設置箇所東壁土層断面 b － b'

12区遺構検出状況（西から）

12区掘り止め基底面（西から）

12区東壁土層断面

13区南壁土層断面

14区南壁土層断面

14区トレンチ内南壁土層断面

15区南壁土層断面

15区トレンチ内東壁土層断面

16区掘り止め基底面（北から）

16区トレンチ内東壁土層断面 a － a'

17区Ⅱ層残存状況（北から）

17区掘り止め基底面（北から）

17区東壁土層断面

18区掘り止め基底面（西から）

18区Ⅱ層中礫集中状況（西から）

19区掘り止め基底面（北から）

19区東西方向土層断面 a － a'

20区Ⅱ層残存状況（東から）

20区南壁土層断面

21区Ⅱ層掘り下げ過程（北から）

21区掘り止め基底面（北から）

21区西壁土層断面

22区遺構検出状況（南から）

22区 SB04検出状況（東から）

23区Ⅱ層上面遺構検出状況（西から）

23区 SB04検出状況（東から）

23区 SB04掘形（東から）

23区 SB05検出状況（西から）

23区東壁土層断面

24区遺構検出状況（西から）

24区掘り止め基底面（西から）

24区 SB04検出状況（西から）

24区 SB04掘形（西から）

24区西壁土層断面

屋外１区（西から）

屋外２区（北から）

屋外２区北壁土層断面

屋外３区（北東から）

屋外３区トレンチ北壁土層断面

確認調査指導風景

工事立会地中梁撤去作業風景（屋内）

工事立会ポイント７（屋内）

工事立会ポイント11（屋内）

工事立会ポイント17（屋内）

工事立会ポイント21（屋内）

工事立会ポイント25（屋外）

工事立会ポイント31中側（屋外）

漏水改修工事立会，漏水状況

漏水改修工事立会，掘削状況

漏水改修工事立会，掘削土層断面

報告書抄録

ふ り が な	くまもとじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ４
書　　名	熊本城跡発掘調査報告書4
副　書　名	熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査
シリーズ名	熊本城調査研究センター報告書
シリーズ番号	第４集
編 著 者 名	美濃口雅朗
編 集 機 関	熊本市熊本城調査研究センター
所　在　地	〒860－0001　熊本市中央区千葉城町3－36（仮設）　TEL 096－355－2224
発 行 年 月 日	平成29年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		緯度・経度（世界測地系）		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
特別史跡熊本城跡・熊本城跡遺跡群	〒860-0007 熊本市中央区古京町3－2	43201	246・247	32°48′31″	130°41′59″	2013.12.16～2016.03.08	約14,000㎡	博物館リニューアル工事

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別史跡熊本城跡・熊本城跡遺跡群	城郭	近世，近代	旧陸軍建物・配水施設，土坑，柱穴	陶磁器類，金属製品，石製品，ガラス製品，瓦	

要　旨

熊本市立熊本博物館の増改築工事に伴い、特別史跡熊本城跡の現状変更が余儀なくされた。これに際しては、工事による特別史跡へ影響を最小限にとどめ、少なくとも特別史跡の本質的価値を構成する江戸時代～明治初年（西南戦争頃）の資料について現状保存を図ることのできる工事計画を策定、実施する必要が生じた。

上記に伴い、平成25年度においては工事計画策定の基礎データを得るため、平成27年度においては、工事により影響が及ぶ部分について記録保存を図るための調査を実施している。

結果、主に近代において熊本城内に所在した旧陸軍輜重隊の建物・配水施設を検出した。出土品は、江戸時代の瓦・陶磁器類が主体である。これらは江戸時代において当該地が主に中級家臣の屋敷地として利用されており、その生活様相を反映したものと考えられる。

熊本城調査研究センター報告書　第４集

熊本城跡発掘調査報告書４

－熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査－

2017年３月

発行　熊本市熊本城調査研究センター
〒860－0001　熊本市中央区千葉城町3-36（仮設）
TEL（096）355－2224
印刷　有限会社　あすなろ印刷
〒860－0821　熊本市中央区本山3－3－1
TEL 096－335－8880